

# 前ノ田村上第1遺跡

Maenodamurakami 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書21

2005

宮崎県埋蔵文化財センター



前ノ田村上第 1 遺跡周辺地形遠景（南から）



前ノ田村上第1遺跡1区～4区完掘状況



2区南部・3区・4区北部完掘状況



3区 区画溝8と掘立柱建物（北西から）



4区 区画溝8・9と掘立柱建物（東から）

# 序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した前ノ田村上第1遺跡は、平成13年度から平成15年度にかけて発掘調査を行い、後期旧石器時代～縄文時代早期における剥片、弥生時代終末期における竪穴住居や周溝状遺構とそれに伴う遺物、中世～近世における掘立柱建物や豊富な貿易陶磁器や国産陶磁器をはじめとする遺構や遺物を多数確認することができました。特に、四面庇建物などの大型の建物や屋敷地を区画するための多数の区画溝が確認される等、中世から近世の拠点的な施設の存在も想定されます。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成17年9月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 宮園淳一

## 例　　言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した前ノ田村上第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、河野康男、渡部誠一郎、小宇都あずさ、古屋美樹、成相景子、高橋浩子、日高敬子が行い、一部について発掘作業員の協力を得た。
- 4 調査区の座標設置及びグリッドの設定は、株式会社測量設計事務所と株式会社上測量設計事務所に委託した。なお、国土座標は旧国土座標第II系に拠る。
- 5 空中写真撮影は、(有)スカイサークル九州と株式会社九州航空に委託した。
- 6 自然科学分析は、株式会社環境研究所に委託した。
- 7 整理作業は、遺物洗浄、注記を現地で行い、残りの接合・実測及びトレイスを宮崎県埋蔵文化財センター本館で行った。図面の作成・遺物実測及びトレイスは河野と整理作業員が行った。
- 8 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1千分の1図をもとに作成した。
- 9 本書で使用した方位は主に座標北(G.N.)である。また、標高は海拔絶対高である。
- 10 土層断面・土器等の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。
- 11 本書の執筆は、河野康男が行い、第3節を河野康男と藤木聰が担当し、陶磁器類の分類については、堀田孝博の協力を得た。編集は河野康男が担当した。
- 12 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　　例

- 1 遺構の略号は次のとおりとする。

S A : 坑穴住居 S L : 周溝状遺構 S B : 掘立柱建物 S C : 土坑 S D : 土壙  
S E : 溝状遺構 S G : 道路状遺構

- 2 掘図の縮尺は次のとおりとする。

石器	2 / 3	土器	1 / 4	陶磁器	1 / 3	石庖丁	1 / 3
磨石	1 / 4	鐵鏃	1 / 2	掘立柱建物	1 / 80	土坑	1 / 40
土壤	1 / 25	竪穴住居	1 / 50	周溝状遺構	1 / 50		

以上を基本とするが、これ以外のものもある。

# 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	2
第Ⅲ章 調査の経過と方針	4
第1節 確認調査の概要	4
第2節 発掘調査の方法	5
第3節 整理作業及び報告書作成	5
第Ⅳ章 調査の記録	6
第1節 調査の概要	6
第2節 基本層序	11
第3節 旧石器時代～縄文時代早期の調査	12
1 旧石器時代の調査	12
2 縄文時代早期の調査	14
第4節 弥生時代の遺構と遺物	15
1 竪穴住居	15
2 周溝状遺構	24
3 調査区内出土遺物	26
第5節 中世～近世の遺構と遺物	30
1 区画溝	30
2 溝状遺構	39
3 挖立柱建物	55
4 ピット出土遺物	96
5 土坑	98
6 土壙	106
7 石組遺構	108
8 道路状遺構	108
9 調査区内出土遺物	112
第6節 その他の遺物	112
第V章 自然科学分析	121
第1節 目的	121
第2節 テフラ分析	121
1 調査地点	121
2 分析結果及びまとめ	121
第3節 植物珪酸体分析	121
1 試料	121
2 分析結果及びまとめ	121
第VI章 まとめ	124

## 挿 図 目 次

第1図 前ノ田村上第1遺跡と周辺遺跡位置図 (S = 1/50,000)	
第2図 遺跡配置図 (S = 1/25,000) .....	3
第3図 遺跡位置図 (S = 1/4,000) .....	3
第4図 確認調査トレンチ配置図 (S = 1/4,000) .....	4
第5図 道構配置図 (S = 1/500) .....	7~10
第6図 グリッド配置図 (S = 1/2,000) .....	11
第7図 旧石器時代の墳・石器分布図 (S = 1/300) .....	12
第8図 旧石器時代の墳・石器分布図 (S = 1/300) .....	13
第9図 純文時代早期の遺物実測図 .....	14
第10図 弥生時代遺物配置図 (S = 1/1,000) .....	15
第11図 S A 1実測図 (S = 1/50) .....	16
第12図 S A 1未出土の遺物出土状況 (S = 1/50) .....	17
第13図 S A 1未出土土遺物実測図 (1) .....	18
第14図 S A 1未出土土遺物実測図 (2) .....	19
第15図 S A 1埋土遺物実測図 (1) .....	21
第16図 S A 1埋土遺物実測図 (2) .....	22
第17図 S A 1埋土遺物実測図 (3) .....	23
第18図 S A 1フローテーション法洗浄用試剤 .....	24
第19図 S L 1実測図 (S = 1/50) .....	25
第20図 S L 1出土遺物実測図 .....	26
第21図 弥生時代調查区内出土遺物実測図 .....	26
第22図 区画番号1~4実測図 (S = 1/400) .....	32
第23図 区画番号1~4及びS E 26・27実測図 .....	33
第24図 区画番号5~7実測図 (S = 1/400) .....	34
第25図 区画番号5~7土質図 .....	35
第26図 区画番号8~12実測図 (S = 1/400) .....	40
第27図 区画番号8~12土質図 .....	41
第28図 区画番号13~16実測図 (S = 1/400) .....	42
第29図 区画番号13~16土質図 .....	43
第30図 潟状遺構実測図 (1) (S = 1/400) .....	44
第31図 潟状遺構実測図 (1) .....	45
第32図 潟状遺構実測図 (2) (S = 1/400) .....	46
第33図 潟状遺構土質図 (2) .....	47
第34図 区画番号出土遺物実測図 (1) .....	50
第35図 区画番号出土遺物実測図 (2) .....	51
第36図 区画番号出土遺物実測図 (3) .....	52
第37図 潟状遺構出土遺物実測図 (1) .....	53
第38図 潟状遺構出土遺物実測図 (2) .....	54
第39図 S B 1・S B 2実測図 (S = 1/80) .....	56
第40図 S B 3・S B 4実測図 (S = 1/80) .....	57
第41図 S B 5・S B 6実測図 (S = 1/80) .....	58
第42図 S B 7・S B 8実測図 (S = 1/80) .....	60
第43図 S B 9実測図 (S = 1/80) .....	61
第44図 S B 10実測図 (S = 1/80) .....	62
第45図 S B 11実測図 (S = 1/80) .....	63
第46図 S B 12・S B 13実測図 (S = 1/80) .....	64
第47図 S B 14・S B 15実測図 (S = 1/80) .....	65
第48図 S B 16・S B 17実測図 (S = 1/80) .....	67
第49図 S B 18・S B 19実測図 (S = 1/80) .....	68
第50図 S B 20実測図 (S = 1/80) .....	69
第51図 S B 21・S B 22実測図 (S = 1/80) .....	70
第52図 S B 23実測図 (S = 1/80) .....	72
第53図 S B 24・S B 25実測図 (S = 1/80) .....	73
第54図 S B 26・S B 27実測図 (S = 1/80) .....	74
第55図 S B 28・S B 29実測図 (S = 1/80) .....	75
第56図 S B 30・S B 31実測図 (S = 1/80) .....	76
第57図 S B 32実測図 (S = 1/80) .....	78
第58図 S B 33・S B 34実測図 (S = 1/80) .....	79
第59図 S B 35・S B 36実測図 (S = 1/80) .....	80
第60図 S B 37実測図 (S = 1/80) .....	81
第61図 S B 38・S B 39実測図 (S = 1/80) .....	83
第62図 S B 40・S B 41実測図 (S = 1/80) .....	84
第63図 S B 42実測図 (S = 1/80) .....	85
第64図 S B 43実測図 (S = 1/80) .....	86
第65図 S B 44実測図 (S = 1/80) .....	87
第66図 S B 45実測図 (S = 1/80) .....	88
第67図 S B 46実測図 (S = 1/80) .....	89
第68図 S B 47実測図 (S = 1/80) .....	91
第69図 S B 48・S B 49実測図 (S = 1/80) .....	92
第70図 S B 50実測図 (S = 1/80) .....	93
第71図 S B 51実測図 (S = 1/80) .....	94
第72図 S B 52実測図 (S = 1/80) .....	95
第73図 振立柱建物出土遺物実測図 .....	97
第74図 ピット出土遺物実測図 .....	97
第75図 S C 1~S C 5実測図 (S = 1/40) .....	99
第76図 S C 6~S C 11実測図 (S = 1/40) .....	100
第77図 S C 12~S C 16実測図 (S = 1/40) .....	101
第78図 S C 17~S C 28実測図 (S = 1/40) .....	102
第79図 S C 26~S C 28実測図 (S = 1/50・1/40) .....	103
第80図 土坑出土遺物実測図 .....	105
第81図 S D 1実測図及び出土遺物実測図 .....	106
第82図 S D 2実測図及び出土遺物実測図 .....	107
第83図 S D 3実測図及び出土遺物実測図 .....	107
第84図 石組遺構実測図 (S = 1/20) 及び 石組遺構上部除去状況 (北から) .....	109
第85図 S G 1~S G 3実測図及び上層図 .....	110
第86図 S G 2・S G 3出土遺物実測図 .....	111
第87図 中世~近世調査区内出土遺物 (1) .....	113
第88図 中世~近世調査区内出土遺物 (2) .....	114
第89図 その他の遺物 .....	115

## 表 目 次

第1表 後期旧石器時代の石材別の動き .....	12
第2表 旧石器時代・石器種類表 .....	14
第3表 純文時代早期の遺物観察表 .....	14
第4表 S A 1フローテーション法洗浄結果 .....	24
第5表 弥生土器観察表 (1) .....	27
第6表 弥生土器観察表 (2) .....	28
第7表 弥生時代鉢形品種表 .....	29
第8表 弥生時代石器観察表 .....	29
第9表 S B 1柱穴計測表 .....	56
第10表 S B 2柱穴計測表 .....	56
第11表 S B 3柱穴計測表 .....	57
第12表 S B 4柱穴計測表 .....	57
第13表 S B 5柱穴計測表 .....	57
第14表 S B 6柱穴計測表 .....	60
第15表 S B 7柱穴計測表 .....	60
第16表 S B 8柱穴計測表 .....	60

第17表	S B 9柱穴計測表	61	第73表	その他遺物 (2)	130
第18表	S B10柱穴計測表	61	第74表	テフラ分析結果	122
第19表	S B11柱穴計測表	61	第75表	植物組織体分析結果 (1)	122
第20表	S B12柱穴計測表	64	第76表	植物組織体分析結果 (2)	123
第21表	S B13柱穴計測表	65	第77表	出土遺物集成表 (1)	126
第22表	S B14柱穴計測表	65	第78表	出土遺物集成表 (2)	127
第23表	S B15柱穴計測表	65	第79表	出土遺物集成表 (3)	128
第24表	S B16柱穴計測表	67	第80表	出土遺物集成表 (4)	129
第25表	S B17柱穴計測表	67	第81表	出土遺物集成表 (5)	130
第26表	S B18柱穴計測表	68			
第27表	S B19柱穴計測表	68			
第28表	S B20柱穴計測表	69			
第29表	S B21柱穴計測表	70			
第30表	S B22柱穴計測表	70			
第31表	S B23柱穴計測表	72			
第32表	S B24柱穴計測表	73			
第33表	S B25柱穴計測表	73			
第34表	S B26柱穴計測表	74			
第35表	S B27柱穴計測表	74			
第36表	S B28柱穴計測表	75			
第37表	S B29柱穴計測表	75			
第38表	S B30柱穴計測表	75			
第39表	S B31柱穴計測表	75			
第40表	S B32柱穴計測表	78			
第41表	S B33柱穴計測表	79			
第42表	S B34柱穴計測表	79			
第43表	S B35柱穴計測表	80			
第44表	S B36柱穴計測表	80			
第45表	S B37柱穴計測表	81			
第46表	S B38柱穴計測表	81			
第47表	S B39柱穴計測表	81			
第48表	S B40柱穴計測表	85			
第49表	S B41柱穴計測表	85			
第50表	S B42柱穴計測表	85			
第51表	S B43柱穴計測表	86			
第52表	S B44柱穴計測表	86			
第53表	S B45柱穴計測表	88			
第54表	S B46柱穴計測表	89			
第55表	S B47柱穴計測表	89			
第56表	S B48柱穴計測表	92			
第57表	S B49柱穴計測表	92			
第58表	S B50柱穴計測表	93			
第59表	S B51柱穴計測表	93			
第60表	S B52柱穴計測表	93			
第61表	中世～近世柱立柱建物一覧表	96			
第62表	中世～近世出土遺物観察表 (1)	116			
第63表	中世～近世出土遺物観察表 (2)	117			
第64表	中世～近世出土遺物観察表 (3)	118			
第65表	中世～近世土製品観察表	119			
第66表	中世～近世ガラス製品観察表	119			
第67表	中世～近世鉄製品観察表	119			
第68表	中世～近世石器・石製品観察表	119			
第69表	中世～近世陶製品観察表	119			
第70表	中世～近世土坑一覧表	120			
第71表	中世～近世土壤一覧表	120			
第72表	その他の遺物 (1)	120			

## 卷頭図版目次

巻頭図版1	前ノ田村上第1道跡周辺地形図(南から)
巻頭図版2	前ノ田村上第1道跡1区～4区断面図
巻頭図版3	2区南端・3区・4区北部完掘状況
巻頭図版4	3区 区画溝8と柱立柱建物(北西から) 4区断面8・9と柱立柱建物(東から)

## 図版目次

図版1	F10G r後削開石器時代遺物出土状況／5区旧石器時代 調査作業風景／S A 1床土抜化材・遺物出土状況／ S A 1床土抜化材出土状況／S A 1床土前の状況／ S L 1床出状況／S L 1完掘状況／S L 1遺物出土状況	131
図版2	1区・2区北部完掘状況(区画溝1～4)	132
図版3	2区南端・3区北部完掘状況(区画溝5～7)	133
図版4	3区西部完掘状況	134
図版5	3区南部・4区北部完掘状況(区画溝8、9、11、12)	135
図版6	4区東部・5区遺物検出状況(区画溝8、10、13、14、16)	136
図版7	2区・区画溝5と柱立柱建物／3区南部SB47	137
図版8	S B11、12、13の柱穴の切り合ひの様子／ S B17S H 2壁面出土状況／2区ピット土壁面出土状況／ S C15土層断面／S C15完掘状況／S C23検出状況／ S C28半状況	138
図版9	S D 1中央遺物を残した完掘状況／S D 2土層断面／ S D 2底出土状況／S D 3中央部遺物を残した完掘状況／ S G 2完掘状況／S G 3壁面出土状況	139
図版10	石組造墻上除土状況／石組造垣上除土状況／ 石組造垣完掘状況／堤場でのコアーチング法土坑作業の様子 ／土洗浄で土に含まれた微細遺物検出を行なう様子／ 周辺造垣土壁下げと土耕作業の様子／柱穴の半蔵、完掘 作業の様子 (1)／柱穴の半蔵、完掘作業の様子 (2)	140
図版11	旧石器時代出土遺物・農業早期出土遺物／S A 1床直上出 土土器	141
図版12	S A 1床直上出土石器・鉄器／S A 1埋土出土遺物 (1)	142
図版13	S A 1床直上出土遺物 (2)／S A 1埋土出土遺物 (3)	143
図版14	S A 1床直上出土遺物 (4)／S L 1出土遺物	144
図版15	野生時代区内出土遺物／区画溝2・4出土遺物／区画 溝6出土遺物／区画溝4出土遺物／区画溝5出土遺物 (1)	145
図版16	区画溝5出土遺物 (2)／区画溝12出土遺物	146
図版17	周状遺構出土遺物／柱立柱建物出土遺物 (1)／ 柱立柱建物出土遺物 (2)／ピット出土遺物／土坑出土遺物	147
図版18	S D 1・S D 3出土遺物／S D 2出土遺物／S G 2・S G 3出土遺物／中世～近世調査区内出土遺物 (1)／中世～ 近世調査区内出土遺物 (2)／中世～近世調査区内出土遺 物 (3)／中世～近世調査区内出土遺物 (4)／中世～近 世調査区内出土遺物 (5)／その他の遺物	148



1 銀座第1遺跡	2 銀座第2遺跡	3 銀座第3A遺跡	4 天神本第2遺跡	5 大内原遺跡	6 中ノ迫第1遺跡
7 中ノ迫第2遺跡	8 中ノ迫第3遺跡	9 前ノ田村上第1遺跡	10 赤坂遺跡	11 湯牟田遺跡	12 蔗山村遺跡
13 後牟田遺跡	14 霧島遺跡	15 白駒遺跡	16 旭ヶ丘遺跡	17 番野地C遺跡	18 椎原遺跡
19 大久保遺跡	20 谷ノ口遺跡	21 住吉B遺跡	22 卒手遺跡	23 上ノ原遺跡	24 丸山西原遺跡
25 松ヶ迫遺跡	26 東平下遺跡	27 把吉田遺跡	28 中ノ迫A遺跡	29 野船尾遺跡	30 川南古墳群

※ 1~11は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う発掘調査遺跡。

第1図 前ノ田村上第1遺跡と周辺遺跡位置図 (S=1/50,000)

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年2月に基本計画がなされ、平成9年3月には整備計画路線となつた。さらに、平成9年12月に建設大臣から日本道路公团へ施行命令が出され、公团では翌年の2月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなつた。調査は平成11年度から日本道路公团の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行つてゐる。

本遺跡の確認調査は、3回に分けて行つた。第一次確認調査は、平成13年9月11日～11月5日で、調査区北部の面積8,100m<sup>2</sup>を対象に実施した。その結果、6,100m<sup>2</sup>を対象とする第一次調査が決定した。第二次確認調査は、平成14年10月15日～10月30日で、調査区南部の面積4,900m<sup>2</sup>を対象に実施した。その結果、全調査区の4,900m<sup>2</sup>を対象とする第二次調査が決定した。第三次確認調査は、第二次調査と並行して平成15年4月中旬に調査区中央部の面積4,300m<sup>2</sup>を対象に実施した。その結果、全調査区の4,300m<sup>2</sup>を対象とする第三次調査が決定した。

実際の本調査の調査期間は、以下のとおりである。  
第一次調査：平成13年12月10日～平成14年10月11日  
第二次調査：平成14年12月12日～平成15年5月9日  
第三次調査：平成15年6月23日～平成15年12月12日

## 第2節 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

矢野 剛（平成13年度）

米良 弘康（平成14・15年度）

宮園 淳一（平成16・17年度）

副所長兼総務課長

菊池 茂仁（平成13年度）

大薗 和博（平成14～16年度）

総務課長

宮越 尊（平成17年度）

総務係長

亀井 雅子（平成13年度）

野邊 文博（平成14年度）

主幹兼総務係長

石川 恵史（平成15～17年度）

副所長兼調査第二課長

岩永 哲夫（平成13～17年度）

調査第一課長

面高 哲郎（平成13年度）

児玉 章則（平成14・15年度）

高山 富雄（平成16・17年度）

調査第一係長

谷口 武範（平成13～16年度）

主幹兼調査第一係長

長津 宗重（平成17年度）

調査第二係長

長津 宗重（平成13～15年度）

主幹兼調査第二係長

長津 宗重（平成16年度）

背付 和樹（平成17年度）

主査（調査担当）

渡部誠一郎（平成13・14年度）

河野 康男（平成13～15年度）

主任主事（調査担当）

高橋 浩子

調査員（調査担当）

古屋 美樹 成相 景子 日高 敏子

小宇都あずさ

主査（報告書担当）

河野 康男（平成13～17年度）

調査指導

小畑弘己（熊本大学） 本田道輝（鹿児島大学）

泉 拓良（京都大学） 田崎博之（愛媛大学）

柳沢一男（宮崎大学）

広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

前ノ田村上第1遺跡は、宮崎県児湯郡川南町大字川南字須田久保に所在する。本遺跡は尾鈴山の南東に位置し、小丸川の支流切原川と平田川の支流綿打川にはさまれた十文字扇状地Ⅱ面上にある。

本遺跡の大半を占める田畠地は、戦後の昭和23～30年に実施された国営開田事業によって削平・造成されている。地域住民の聞き取り調査によると、この開田事業によって、この地にあった家屋等が周辺に移設されているようである。

今回の調査においては、旧石器時代～縄文時代早期の遺物と弥生時代終末期、中世～近世にかけての遺構と遺物が確認された。そこで、周辺の遺跡分布状況について、同時期の遺跡について概観したい。

**【旧石器時代】** 旧石器時代の調査例は少なく、後牟田遺跡、霧島遺跡などである。後牟田遺跡は、第1文化層の縄文時代早期文化層を始めとして第2文化層から第10文化層まで旧石器時代の文化層が続いている。テフラによって石器群の変遷が確認された標準となる遺跡である。古くは約3.5万年前の褐色ローム層上部から焼跡群や石皿、磨石などが出土し、最古とされていた鹿児島県中種子町立切遺跡を数千年遡る生活痕跡が確認されている。他に、大野寅男氏の踏査や川南町の分布調査によって番野地C遺跡・大久保遺跡・谷ノ口遺跡・卒手遺跡などの数多くの後期旧石器時代の遺跡が確認されている。近年の調査では、中ノ迫第1遺跡において敲石、ナイフ形石器、スクレイバー等の石器の出土とともに43基の礫群が検出されている。

**【縄文時代】** 縄文時代の遺跡の調査例は、後牟田遺跡、霧島遺跡、蔵庫村遺跡、上ノ原遺跡と少ないが、川南町の分布調査によって60箇所の遺跡が確認されている。特に押型文土器を伴う早期の遺跡が多く、丸山西原遺跡・松ヶ迫遺跡・大久保遺跡で確認されている。縄文時代は、旧石器時代と同様、主に山地及び丘陵地に集中する傾向にある。近年の調査では、中ノ迫第1遺跡において集石造構、陥穴状造構等が、検出している。

**【弥生時代】** 弥生時代、川南の台地上や丘陵地縁

辺上において、特に後期から終末期にかけて遺跡が急激に増加する。弥生時代の遺跡は、中期が蔵庫村遺跡同様丘陵地縁辺部、終末期が台地上や丘陵地縁辺部に集中して立地するようである。中期の調査例は未だないが、終末期は、円形と方形の各一基の周溝墓が確認された東平下遺跡、堅穴住居6軒が確認された把言田遺跡、堅穴住居2軒と周溝状造構2基が確認された野稲尾遺跡の調査例がある。現在調査中の赤坂遺跡では、円形周溝墓1基、周溝状造構2基、堅穴住居24軒が検出されている。特に円形周溝墓については、県内でも検出例が少なく、これまで検出されたもののほとんどが低地に造られているのに対して丘陵頂部の平場を選んで造営しているという特徴的な立地が特筆される。

**【歴史時代】** 歴史時代の遺跡については、上垂門の奈良時代後半から平安時代前期ごろに比定される蔵骨器を伴う火葬墓や宗麟原の供養塔等が知られている。川南町は、古代には韓家郷の一部に比定され、韓人（渡来人）との関係を思わせる所であり、また去飛（都農町）の駅と児湯（木城町高城）の駅を結ぶ古代の官道も想定される。また字名に「別府」等の地名が数多く残っており、中世の荘園関係の遺跡が存在する可能性がある。さらに、近年東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、歴史時代の遺構、遺物が数多く確認され始めている。湯牟田遺跡では、掘立柱建物34棟が確認されている。また、現在調査中の赤坂遺跡では、16棟の掘立柱建物とピット群が検出されている。

### 【引用参考文献】

川南町教育委員会2002 『後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』 後牟田遺跡調査団

宮崎県埋蔵文化財センター2001 「蔵庫村遺跡」 『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 53集

鬼塚久美子1997 『宮崎平野の古代交通路に関する予察』『宮崎県史研究』 第11号

川南町教育委員会1983 『川南町史』

川南町教育委員会1983 『川南町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書』



第2図 遺跡周辺地形図 ( $S = 1/25,000$ )



第3図 遺跡位置図 ( $S = 1/4,000$ )

## 第Ⅲ章 調査の経過と方針

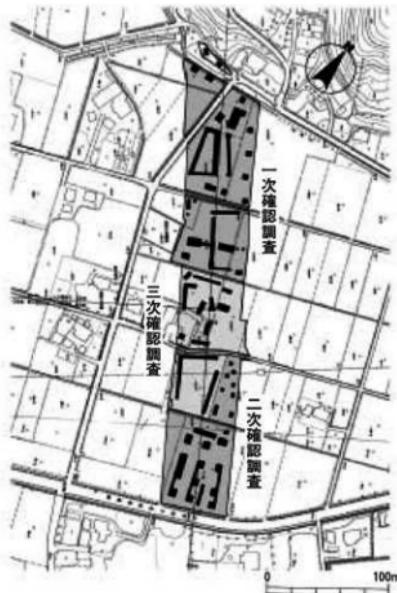
### 第1節 確認調査の概要

本遺跡の確認調査は、本調査に先立って三回に分けて行った。第一次確認調査は、平成13年9月11日～11月5日に調査区北部を対象に実施した。重機も利用して、調査区域面積8,600m<sup>2</sup>のうち10.5%に当たる900m<sup>2</sup>の調査を行った。アカホヤ火山灰層上面において遺構検出を行ったところ多数の柱穴が確認されるとともに、表土中からも土師質土器、須恵質土器、青磁や染付け等の陶磁器類が多数出土した。また、アカホヤ火山灰層の残存状況やトレンチの土層断面から旧地形は、西から東にかけて緩やかに下る斜面であることが確認された。耕作による削平の範囲や土石流の範囲を除外し、6,100m<sup>2</sup>を対象とする第一次調査が決定した。

第二次確認調査は、平成14年10月15日～10月30日で調査区南部の面積4,900m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査地の区分けは、調査区南側に当たる県道都農・綾線に隣接する調査区と北側の一帯高くなった調査区の2区に分けて調査を進めた。北側の調査区は2m×2m、南側調査区は、5m×5mを基本としてトレンチを設定した。アカホヤ火山灰層上面で精査を行い、隨時遺構等の確認を行いながら掘り下げていった。調査対象面積4,900m<sup>2</sup>のうち10%に当たる500m<sup>2</sup>の調査を行った。その結果、一次調査で検出された柱穴の続いていることが確認できなかった。さらに旧石器時代～縄文時代早期を対象にした北側の調査では、2m×2mのトレンチ8本を設定し、遺構の確認を行いながらA-T層まで掘り下げを行った。その結果、全てのトレンチでA-T層が確認された。しかし、一次堆積だと確認できるものは、僅かであり、二次堆積の可能性が高いと判断された。遺物は、A-T層とその上層の暗赤褐色ローム層とが混じり合った褐色ローム層から剥片2点が出土し、全調査区4,900m<sup>2</sup>を対象とする第二次調査が決定した。

第三次確認調査は、調査区中央部を対象に第二次調査と併行して平成15年4月17日～22日に実施した。調査対象地が第一次調査の南側隣接地であることか

ら、第一次調査で検出した柱穴の広がりの範囲、区画溝の有無、波板状の凹凸面を有する道路状遺構の有無に重点を置いて調査を進めた。具体的には一次調査の遺構の分布状況からその続きが想定される場所にトレンチを配置して検出を試みた。その結果、溝状遺構は複数検出されたが、区画溝としてのつながりまでは把握することができなかった。柱穴は、北側調査区全面に分布することが確認された。波板状の凹凸面を有する道路状遺構については、北側端中央部付近に、一部アカホヤ火山灰層上の黒色土が堆積していることが確認されたが、設定したトレンチ内では道路状遺構に関連する遺構を検出することはできなかった。しかし、遺構の検出状況、遺物の出土状況が一次調査の結果に似た傾向を示していることから、全調査区4,300m<sup>2</sup>を対象とする第三次調査が決定した。



第4図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/4,000)

## 第2節 発掘調査の方法

### 【調査方法】

グリッド杭は、国土座標を基準とし10m間隔で設定した。遺構は、原則半裁したうえで掘り下げた。遺構埋土中の遺物は、床面付近のものは遺構実測図中に図化し取り上げたほかは遺構一括とした。遺構実測図の作成は、グリッド杭を利用して1グリッドを南北半分の10m×5mの範囲(A2サイズの方眼紙1枚分)に2分割し、1/20で記録した。主要な遺構については1/10で記録した。写真的記録は適宜行い、6×7判モノクロ・カラー、35mmモノクロ・リバーサル・カラー写真を併用した。遺跡の俯瞰等の空中写真については業者に委託して行った。

### 【柱穴の調査】

本遺跡では、多数の柱穴を検出した。柱穴の調査では、まず、埋土を大きく5種類に分類した。埋土分類の基準は、次のとおりである。

A：しまりのある黒色土。

B：ややしまりのある暗褐色土。暗褐色ブロック等を含む場合もある。

C：混合物が少なく黒褐色系で耕作土に似た土。

D：アカホヤ粒が全体に広がり暗褐色土ブロック、黒褐色土ブロックが搅拌しており、縮まりがない土。

E：その他

以上の基準に照らして埋土の同定を行った。次に、平面プランで柱痕の確認を行い、確認できない場合は検出面から3cmを限度に移植ゴテで表面を精査しながら掘り下げていく。柱痕が確認できないものについては、掘り下げ、柱痕が確認できたものについては、実測図中に柱痕を図化(青色)したうえで半裁し、柱痕の断面形を実測図中に図化して掘り下げる。このような流れで柱穴の調査を進めていった。

柱穴の埋土の分類は、当初柱穴そのものの時代の同定や、掘立柱建物の並びを検討する際に生かすことを目的としていたが、埋土の同定をする際、埋土の乾き具合や、気象条件にも左右され、一貫性のある同定が難しかった。その結果、時代の同定や掘立柱建物の並びを検討する際の資料として、十分活用するまで至らなかった。分類基準の設定や活用の

仕方等、課題が残った。

### 【現地説明会】

本遺跡では、広く町内外に発掘調査の成果を報告する目的で、現地説明会を次のように実施した。

・第1回現地説明会：平成14年5月26日実施。

「第一次調査：調査状況の説明」見学者：132名

・第2回現地説明会：平成14年10月27日実施。

「第一次調査：完掘状況の説明」見学者：72名

・第3回現地説明会：平成15年12月21日実施。

「第三次調査：完掘状況の説明」見学者：79名



現地説明会風景（平成15年12月21日）

## 第3節 整理作業及び報告書作成

整理作業は、発掘現場において平成14年6月～平成14年10月、平成15年7月～平成15年11月の2回に分けて遺物の水洗、注記を行った。その後、埋蔵文化財センターにおいて平成16年2月～平成17年3月に計測、接合、実測、トレース作業を行った。

報告書作成に当たっては、整理作業と並行して遺構図面等の整理および報告書原稿作成を行った。

## 第IV章 調査の記録

### 第1節 調査の概要

本遺跡は、三回に分けて調査を行った。その結果、遺構の検出状況等から関連性の強い一連の遺跡と考えられる。そこで、説明の煩雑さを避けるため、便宜上調査区を東西に走る道路等を境にして、北から1～5区の区を設定して、以下報告することにする。

調査の結果、後期旧石器時代～讃文時代早期、弥生時代終末期、中世～近世の遺構や遺物が確認された。

第一次調査（平成13年12月10日～平成14年10月11日）では、1区と2区の6,100m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。2区の調査を行った後、1区の調査へと移行した。調査では、表土を重機で除去することから始めたが、アカホヤ火山灰（Ⅲ層）上の黒色土（Ⅱ層）の堆積状況の把握が難しく、確実に表土だと判断できる層のみを重機で除去した後、手作業によって掘り下げを行い、表土直下での遺構の検出・精査を行った。その結果、2区南東部にアカホヤ火山灰（Ⅲ層）上の黒色土（Ⅱ層）が僅かに堆積していたものの、調査区の殆どが耕作によって黒色土が削平されている状態であった。従って、一部の遺構を除き殆どの遺構検出は、アカホヤ火山灰（Ⅲ層）上面で行った。検出された遺構は、弥生時代終末期の竪穴住居（1軒）、中世から近世にかけての多数の柱穴と掘立柱建物（26棟）、溝状遺構（20条以上）、道路状遺構（1条）、土坑（24基）、土壤（2基）、石組遺構（1基）である。出土遺物は、弥生土器、石庖丁、鉄鎌、砥石、磨石、土師器、青磁、白磁、国内産陶磁器等である。なお、手作業による掘り下げを行った表土中からも中世～近世にかけての多数の陶磁器類が採集された。

第二次調査（平成14年12月12日～平成15年5月9日）では、4区（東側1/3）と5区の4,900m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。まず5区北側3分の2を対象に、アカホヤ火山灰面（Ⅲ層）で遺構を確認し調査を行った。残りの3分の1で、現代の耕作土を剥がし、道路状遺構と考えられる硬化面を精査した後、アカホヤ火山灰面（Ⅲ層）での遺構確認を行い調査を進めた。

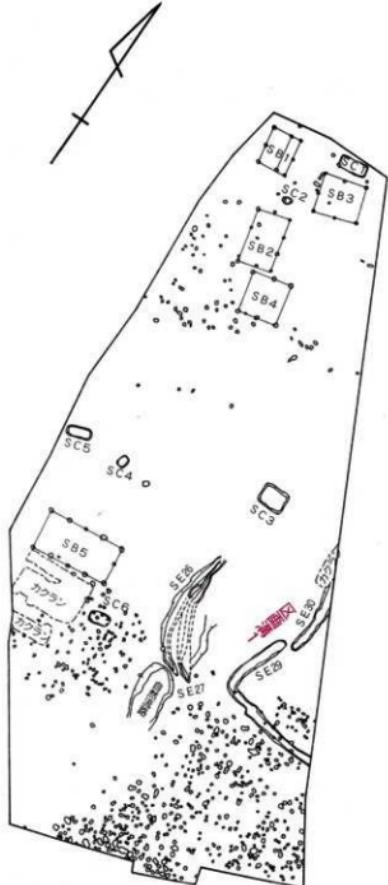
その結果、検出された道路状遺構は、近代のものであることが確認された。5区終了後、4区の調査を進めた。4区においては、アカホヤ火山灰面（Ⅲ層）で遺構を確認した後、褐色ローム（V a層）から下の旧石器時代の調査を行った。実際の調査ではグリッド法による50%調査を基本として、必要に応じて調査範囲を広げていった。その結果、明暗褐色ローム（V b層）と褐色ローム（V c層）で剥片が出土したが、出土状況は疎らであり、遺構については検出されなかった。検出した遺構は、中世から近世にかけての溝状遺構（10条以上）である。溝状遺構は、いずれも耕作に伴う削平により遺存状況が悪く、出土遺物も極めて少なかった。また、一次調査で検出された柱穴や掘立柱建物に係わる遺構・遺物は確認できなかった。出土遺物は、台形石器、彫器、剥片、石鎌等数点と譲である。

第三次調査区は、第一次調査区と第二次調査区との間に位置する。第三次調査（平成15年6月23日～平成15年12月12日）では、3区と4区（西側2/3）の4,300m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。第一次調査の結果から柱穴の分布と陶磁器類の出上りが予想された。そこで、重機による表土除去は、地山から5～7cm程度表土を残した状態に留め、その後は、人力によって掘り下げを行った。出土した遺物は、グリッド一括で取り上げた。検出された遺構は、弥生時代終末期の周溝状遺構（1基）、3区全域と4区の北側で中世から近世にかけての多数の柱穴と掘立柱建物（26棟）、溝状遺構（20条以上）、道路状遺構（2条）、土坑（6基）、土壤（1基）である。出土遺物は、弥生土器、石庖丁、土師器、青磁、白磁、国内産陶磁器等である。

遺跡全体で検出された遺構は、弥生時代終末期の竪穴住居（1軒）と周溝状遺構（1基）、中世から近世にかけての区画溝（16）、溝状遺構（30条）、掘立柱建物（52棟）、土坑（28基）、土壤（3基）、道路状遺構（3条）、石組遺構（1基）である。

なお、グリッドの配置は第6図を参照されたい。

### 【1区】



### 【1区】

- ・区画溝 1 (SE 29・SE 30)
- ・SE 26
- ・SE 27
- ・SB 1
- ・SB 2
- ・SB 3
- ・SB 4
- ・SB 5
- ・SC 1
- ・SC 2
- ・SC 3
- ・SC 4
- ・SC 5
- ・SC 6

### 【2区】

- ・SA 1
- ・区画溝 2 (SE 15)
- ・区画溝 3 (SE 14)
- ・区画溝 4 (SE 13・SE 18)
- ・区画溝 5 (SE 3・SE 7・SE 1)
- ・区画溝 6 (SE 23)
- ・区画溝 7 (SE 22・SE 5)
- ・SE 2
- ・SE 3
- ・SE 4
- ・SE 6
- ・SE 8
- ・SE 9
- ・SE 11
- ・SE 12
- ・SE 24
- ・SE 25
- ・SB 6
- ・SB 7
- ・SB 8
- ・SB 9
- ・SB 10
- ・SB 11
- ・SB 12
- ・SB 13
- ・SB 14

- SE 12
- SE 24
- SE 25
- SB 6
- SB 7
- SB 8
- SB 9
- SB 10
- SB 11
- SB 12
- SB 13
- SB 14
- SB 15
- SB 16
- SB 17
- SB 18
- SB 19
- SB 20
- SB 21
- SB 22
- SB 23
- SB 24
- SB 25
- SB 26
- SC 7
- SC 8
- SC 9
- SC 10
- SC 11
- SC 12
- SC 13
- SC 14
- SC 15
- SC 16
- SC 17
- SC 18
- SC 19
- SC 20
- SC 21
- SC 22
- SD 1
- SD 2
- 石組造構
- SG 1

【2区】



【3区】



【3区】

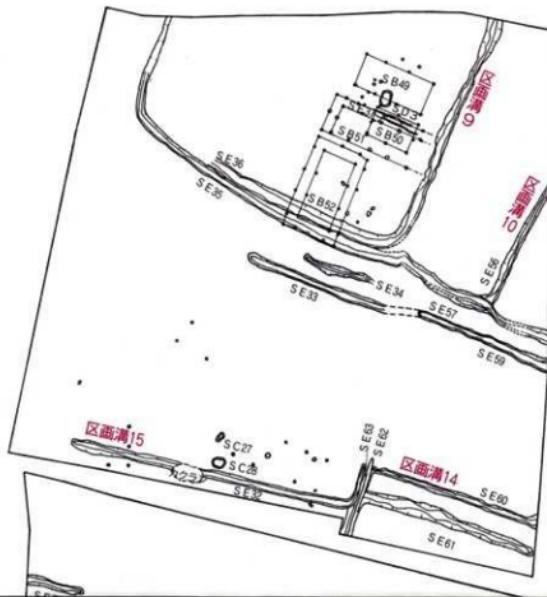
- S L 1
- 区画溝 5 (SE 1)
- 区画溝 6 (SE 23)
- 区画溝 8 (SE 38)
- 区画溝 11 (SE 42)
- 区画溝 12 (SE 41)

[3区]



- ・区画溝 5 (SE 1)
- ・区画溝 6 (SE 23)
- ・区画溝 8 (SE 38)
- ・区画溝 11 (SE 42)
- ・区画溝 12 (SE 41)
- ・SE 39
- ・SE 43
- ・SE 44
- ・SE 46
- ・SE 49
- ・SE 50
- ・SE 51
- ・SE 52
- ・SE 53
- ・SB 27
- ・SB 28
- ・SB 29
- ・SB 30
- ・SB 31
- ・SB 32
- ・SB 33
- ・SB 34
- ・SB 35
- ・SB 36
- ・SB 37
- ・SB 38
- ・SB 39
- ・SB 40
- ・SB 41
- ・SB 42
- ・SB 43
- ・SB 44
- ・SB 45
- ・SB 46
- ・SB 47
- ・SB 48
- ・SC 23
- ・SC 24
- ・SC 25
- ・SC 26
- ・SG 2
- ・SG 3

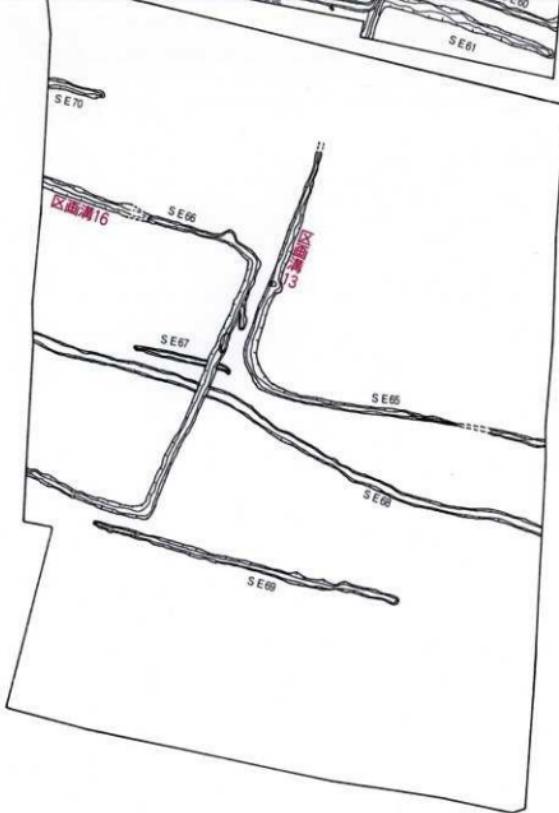
[4区]



[4区]

- ・区画溝 8 (SE 35・SE 57)
- ・区画溝 9 (SE 36)
- ・区画溝 10 (SE 56)
- ・区画溝 13 (SE 61)
- ・区画溝 14 (SE 60)
- ・区画溝 15 (SE 32)
- ・区画溝 16 (SE 66)
- ・SE 22

[5区]



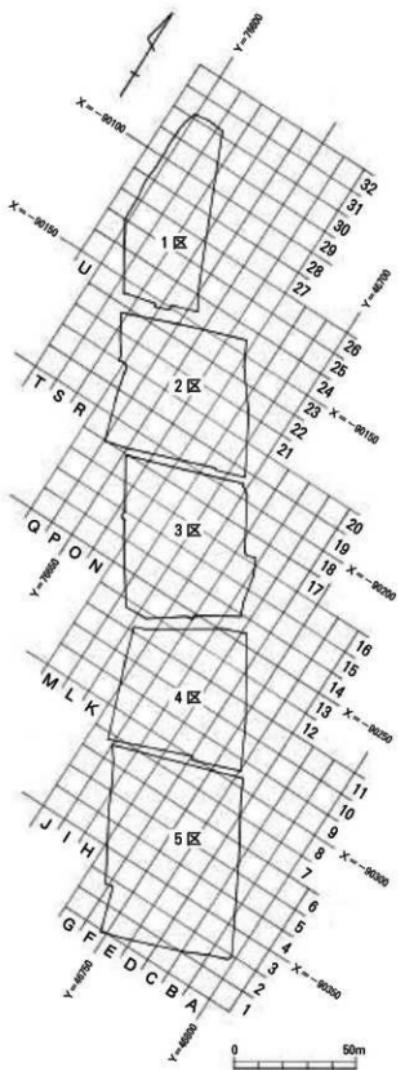
- ・区画溝 10 (S E 56)
- ・区画溝 13 (S E 61)
- ・区画溝 14 (S E 60)
- ・区画溝 15 (S E 32)
- ・区画溝 16 (S E 66)
- ・S E 33
- ・S E 34
- ・S E 59
- ・S E 62
- ・S E 63
- ・S B 49
- ・S B 50
- ・S B 51
- ・S B 52
- ・S C 27
- ・S C 28
- ・S D 3

[5区]

- ・区画溝 13 (S E 65)
- ・区画溝 16 (S E 66)
- ・S E 67
- ・S E 68
- ・S E 69
- ・S E 70



第5図 遺構配置図 (S = 1/500)



第6図 グリッド配置図 ( $S=1/2,000$ )

## 第2節 基本層序

前ノ田村上第1遺跡における基本層序は次のとおりである。基本層序のうち、Ⅲ層以上は3区北壁から、Ⅳ層以下は4区東壁から記録した。なお、Ⅱ層については、調査区の多くが削平によって確認できなかった。

- I 層：表土
- II 層：黒色土【Hue 10YR 1.7/1】  
しまり、粘性共に非常に弱く、径1mm以下の白色粒を極少量含む。
- III 層：黄橙色火山灰：K-Ah【Hue 10YR 6/8】  
鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰堆積層。
- IV 層：黒褐色ローム：MB 0【Hue 5YR 3/1】  
ふわふわとして粘性無し。
- V a層：黒褐色ローム：ML 1【Hue 7.5YR 3/1】  
しまりがあり、粘性無し。
- V b層：明暗褐色ローム：ML 1  
【Hue 7.5YR 3/4】しまりがあり、さらさらとして粘性無し。
- VI 層：小林軽石：Kr-Kb【Hue 7.5YR 4/3】  
褐灰色の固結したブロックが散在し、その中に橙色粒（小林軽石粒）を僅かに含む。
- VII 層：暗赤褐色ローム：MB 1【Hue 5YR 3/2】  
極暗赤褐の固まりが全体に斑点状にみられる。全体に3~5mmの大いな小石粒を含み谷部や落ち込み部分の地形にのみ堆積している。粘性は強い。
- VIII 層：褐色ローム：ML 2【Hue 7.5YR 4/6】  
褐色ロームと始良・Tn火山灰とが混じり合う。粘性無し。
- IX a層：始良Tn：AT【Hue 7.5YR 5/6】  
始良・Tn火山灰の二次的な堆積層で、しまりがなくさくさくとしている。
- IX b層：始良Tn：AT【Hue 7.5YR 6/6】  
始良Tn火山灰の一次堆積で、しまりがある。
- X層：礫層

### 第3節 旧石器時代～縄文時代早期の調査

#### 1 旧石器時代の調査

##### 【調査方法と概要】

確認調査で遺物の確認された箇所を中心に順次拡張して調査を実施した。最終的には、4区の東部分と5区を合わせ395m<sup>2</sup>の調査を行った。その結果、礫・石器はE10グリッド周辺の堆層を中心に包含されており、一部V層中にまで上下動していた。

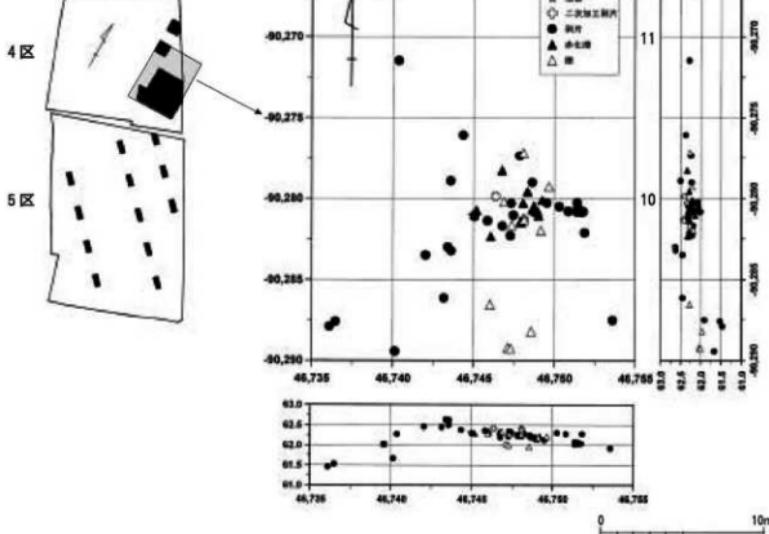
##### 【出土礫】

礫は、E10グリッド周辺に石器分布と重複して

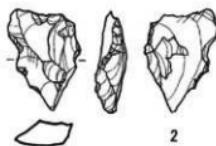
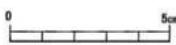
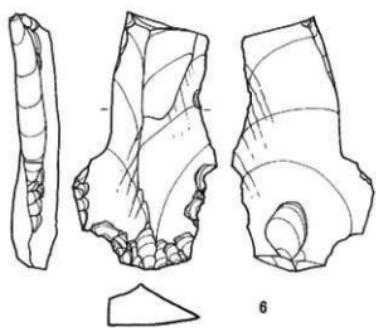
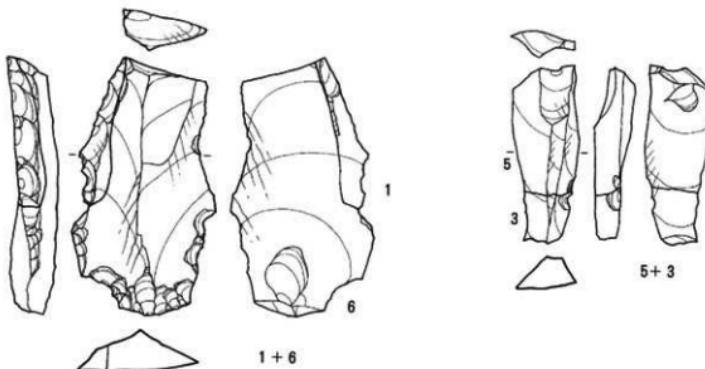
第1表 後期旧石器時代の石材別の動き

石材	器種組成・点数	接合	剥片削離技術
黄岩製石器群(緻密なもの)	形器 1・二次加工ある剥片 2・剥片 7	形器+影面作出剥片 二次加工ある剥片の折れ面接合	剥片持ち込み後、若干の石器製作等
黄岩製石器群(粗質なもの)	剥片 2	剥片 2 点の剥離接合	若干の剥片剥離か?
ホルンフェルス製石器群	剥片 2	剥片 2 点の剥離面接合	剥片の持ち込みか?
奥ノ木津留産黒曜石製石器群	剥片 9	なし	
奥ノ木津留産黒曜石製石器群	台形石器 1 (透視度高い) 剥片 9 (不純物含む) 剥片 2 (不純物含み、結構模様あり)		製品持ち込み 剥片剥離 剥片剥離

・折れ面接合：折れ面どうしの接合  
・剥離接合：剥片剥離による剥離面どうしの接合



第7図 旧石器時代の礫・石器分布図 (S = 1/300)

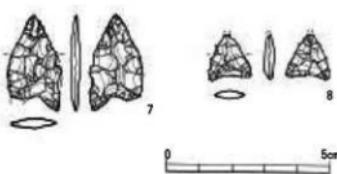


第8図 旧石器時代遺物実測図

第2表 旧石器時代礫・石器観察表

No.	件名	Gr.	■	種類	石材	X座標	Y座標	大きさ	幅×高	厚さ	重さ	備考
4	75 F-0-1	WHT	S	H	-02020.078	46746.924	62.315	3.4	2.0	0.9	3.3	海老山海出上
2	23 D-1-2	Vb-T	T	Ob	-02020.838	46746.813	62.011	3.2	2.2	0.9	4.2	
3	23 D-1-2	Vb-T	T	Ob	-02020.838	46746.813	62.011	3.2	2.2	0.9	4.2	767g 海出
5	76 F-0-2	Vb-T	F	Sb	-02021.236	46746.340	62.415	4.7	2.0	1.1	10.0	35t 合成
1	29 E-0-4	VLZ	F	Sb	-02021.539	46753.901	6' 912	8.0	4.4	1.8	46.4	海老山海出上
22	F-0-4	VLZ	F	H	-02026.145	46751.143	62.449	2.4	2.6	0.8	4.2	
24	F-1-4	Vb-T	F	Ob	-02027.054	46745.842	62.496	1.8	2.0	0.9	0.5	
24	F-1-4	Vb-T	F	H	-02027.054	46745.842	62.496	1.8	2.0	0.9	0.5	
26	F-0-2	Vb-T	F	H	-02021.296	46745.045	62.355	2.1	2.0	0.5	2.8	
27	F-0-2	Vb-T	F	H	-02021.346	46745.819	62.355	3.1	2.0	0.5	2.8	
29	F-0-2	Vb-T	F	Ob	-02024.296	46747.830	62.219	1.8	0.9	0.3	0.4	
30	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02027.026	46747.425	62.312	1.2	1.5	0.4	0.5	
32	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02026.219	46747.425	62.312	1.2	1.5	0.4	0.5	
33	F-0-1	Vb-T	F	H	-02026.017	46753.900	62.351	1.3	0.5	0.2	0.3	
45	F-0-2	WHT	F	Ob	-02020.239	46748.825	62.115	1.4	2.0	0.9	0.7	
58	F-1-3	VLZ	F	H	-02027.354	46747.830	62.348	2.1	2.0	0.8	4.2	
57	F-1-3	VLZ	F	Ob	-02027.354	46746.747	62.348	1.0	0.6	0.3	0.2	
58	F-1-3	VLZ	F	H	-02027.354	46746.747	62.348	1.0	0.6	0.3	0.2	
66	F-0-1	Vb-T	F	Ob	-02021.596	46750.803	62.339	0.9	0.8	0.3	0.3	
91	F-0-1	Vb-T	F	Ob	-02026.196	46750.830	62.277	1.4	0.9	0.7	0.5	
62	F-0-1	Vb-T	F	Ob	-02026.097	46751.438	62.276	1.1	0.95	0.6	0.5	
63	F-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.296	46751.403	62.074	3.5	2.7	1.3	8.7	
64	F-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.296	46751.403	62.074	3.5	2.7	1.3	8.7	
65	F-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.296	46751.403	62.074	3.5	2.7	1.3	8.7	
66	F-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.296	46751.403	62.074	3.5	2.7	1.3	8.7	
67	F-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.846	46751.677	62.030	1.3	2.5	0.7	4.9	
68	E-0-1	Vb-T	F	Sb	-02026.816	46751.387	62.011	1.2	1.05	0.7	0.5	
69	F-0-1	Vb-T	F	Ob	-02026.816	46751.387	62.011	1.2	1.05	0.7	0.5	
70	F-0-1	Va-T	F	H	-02024.196	46743.385	62.026	2.3	2.0	0.8	2.8	
71	F-0-1	Vb-T	F	H	-02024.196	46743.003	62.026	2.3	2.0	0.8	2.8	
72	F-0-1	Vb-T	F	H	-02027.354	46736.469	6' 331	0.9	0.6	1.7	44.7	
73	F-0-1	Vb-T	F	H	-02027.354	46736.003	6' 405	2.0	2.6	1.3	7.3	
74	F-0-1	Vb-T	F	H	-02027.354	46736.003	6' 405	2.0	2.6	1.3	7.3	
75	F-0-1	Vb-T	F	H	-02027.412	46736.469	62.259	0.9	0.6	2.8	10.1	
38	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.307	46747.833	62.332	1.3	0.7	0.3	0.3	
33	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02021.047	46749.800	62.443	7.1	4.8	3.3	17.8	赤峰
34	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.792	46749.893	62.238	8.9	6.8	6.0	40.0	赤峰
35	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.792	46749.893	62.238	8.9	6.8	6.0	40.0	赤峰
36	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.454	46748.137	62.339	8.0	4.7	3.8	35.8	赤峰
37	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.256	46748.061	62.238	7.0	4.4	4.1	35.2	赤峰
42	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.722	46748.061	62.237	6.2	7.2	5.1	35.5	赤峰
43	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.328	46748.061	62.356	6.8	6.0	4.1	19.0	赤峰
44	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.328	46748.061	62.356	6.8	6.0	4.1	19.0	赤峰
45	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02021.399	46748.141	62.339	0.7	0.6	1.7	17.0	赤峰
46	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02021.494	46747.873	62.238	8.5	5.0	3.7	34.8	赤峰
48	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02021.448	46747.960	62.345	5.5	4.4	4.0	17.5	赤峰
54	F-1-3	VLZ	F	Ob	-02025.551	46748.715	62.256	4.8	4.2	4.1	17.5	赤峰
55	F-1-3	VLZ	F	Ob	-02025.551	46748.715	62.256	4.8	4.2	4.1	17.5	赤峰
56	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02024.587	46747.342	62.279	8.8	6.0	19	23.5	
44	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02024.148	46747.107	62.636	5.7	3.6	2.2	45.0	
59	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.554	46747.107	62.636	5.0	4.8	3.8	27.3	
51	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.222	46747.107	62.619	2.7	6.15	0.6	0.5	
52	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.222	46747.107	62.619	2.7	6.15	0.6	0.5	
53	F-0-2	VLZ	F	Ob	-02020.312	46747.877	62.619	2.0	2.0	1.9	4.0	
55	F-1-3	VLZ	F	Ob	-02027.178	46748.079	62.209	3.4	3.2	1.8	22.4	
56	F-1-3	VLZ	F	Ob	-02027.252	46749.601	62.216	7.1	6.0	4.1	17.4	

GR: 光滑 GR: 刃削 T: 白泥岩 S: 黑泥岩 Ob: 無處理 G: Ch: チート Os: 高嶺土層生産地 H: H: 4.4シルクス



第9図 繩文時代早期の遺物実測図

第3表 繩文時代早期の遺物観察表

No.	件名	Gr.	■	種類	石材	X座標	Y座標	大きさ	最大長	最大幅	最大厚	重さ	備考
7	28 F-0-2	Va-T	石	白泥	-02021.648	46746.860	62.544	3.0	1.7	0.3	1.1		
8	19 E-0-1	Va-T	石	白泥	-02023.685	46750.208	62.468	1.4	1.3	0.4	0.5		
21	F-0-4	Va-T	石	白泥	-02026.971	46743.052	62.581	4.7	3.8	1.5	21.3		

## 第4節 弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居1軒と周溝状遺構1基が検出された。このうち住居内からは、甕、壺、鉢、高杯、器台等の弥生土器や磁石、磨石、台石といった石器類、さらに鉄器としては鐵鏃が出土した。その他調査区内より未製品の石庖丁、磨製の石劍状石器が出土した。

### 1 竪穴住居（SA）

#### SA 1（第11図）

##### 【規模】

SA 1は、一辺4mの隅丸方形プランであるが、西側と南側に幅0.8m、長さ1.8mの張り出し部を有する。また、住居床面には高さ0.1m前後の段差が北側と西側に見られ、ベッド状の高まりを呈している。住居主軸はN-5°-Eで、床面積は19.0m<sup>2</sup>で、その内ベッド状部分の面積は9.8m<sup>2</sup>である。

##### 【埋土の状況】

竪穴部埋土は①～⑩層であり、⑧層を掘り下げたあたりから、住居に伴う建築部材と考えられる炭化材が検出された。炭化材や焼土の粒を含む⑧層や⑨層は住居の焼失時に堆積した可能性がある。⑩層は

貼床の土である。

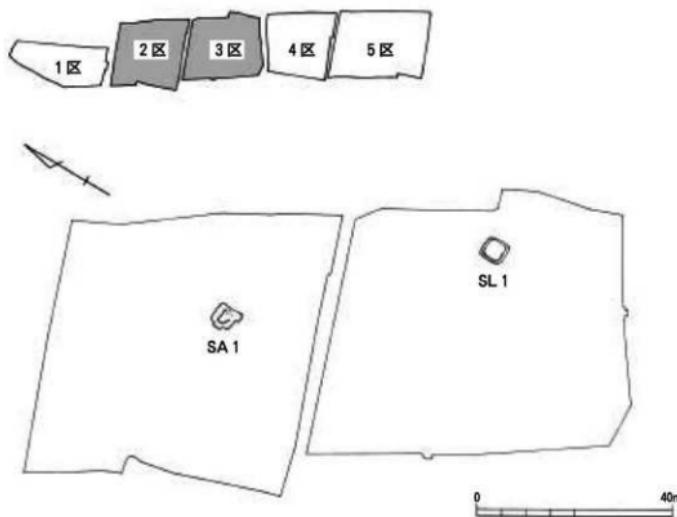
埋土の堆積状況は、焼失に伴う⑧層、⑨層の堆積以後住居中央部は大きく窪んだままであり⑦～①層が順に自然堆積していったことが読み取れる。

##### 【柱穴】

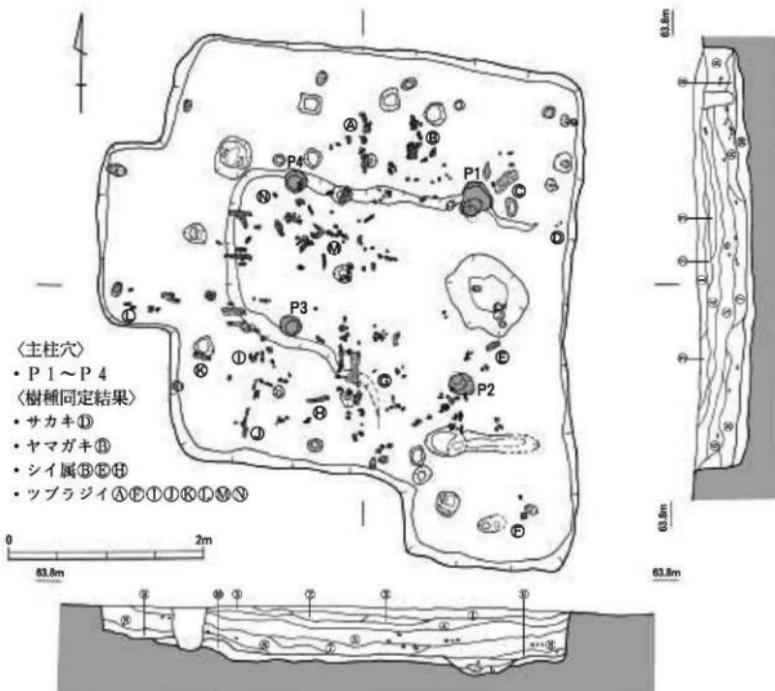
主柱穴は4本で、ベッド状遺構に囲まれた内側で確認された。柱掘方は貼床抜去後に検出された。柱掘方の長径(cm)、短径(cm)は、P 1(36×44)、P 2(30×26)、P 3(22×20)、P 4(22×22)である。柱穴の掘方は深さがおよそ0.5mを測る。柱穴埋土は、全体的に1～2cm角の炭化物を多く含み、他の柱穴とは様相が異なる。

地山掘削の時点で柱穴を掘り柱を立て、貼床を張る時に柱の周囲も固めたのではないかと推測される。

その他、住居壁面近くには、径10cm前後の小さな柱穴が四壁を一周するように検出された。深さは5～8cmを測るが、規則的な配置は見い出し難い。おそらく主柱穴の補助的な柱としての可能性が考えられる。



第10図 弥生時代遺構配置図 (S=1/1,000)



- ①: 黒色土 (Hue 7.5YR 2/1)。きめ細かくてさらさらとしておりやや粘性をもつ。  
 ②: 黒褐色土 (Hue 10YR 2/2)。土の質は①とほぼ同じであるが、やや黒味が強い。  
 ③: 黒褐色土 (Hue 10YR 2/2) に焼土 (明褐色土 Hue 7.5YR 5/6) を全体に粒状に含む。  
 ④: 黒色土 (Hue 10YR 1.7/1)。きめ細かくやや粘性をもつ。①、②層と比べてきめ細かくやしまっている。黒味が強い。Ah粒 (直徑1mm程度) を僅かに含む。  
 ⑤: 黒色土 (Hue 10YR 1.7/1) ~ 黑褐色土 (Hue 10YR 3/1)。きめ細かいが粘性はあまり無く、パサパサとしている。Ah粒を少量含む。  
 ⑥: 色は④と同一。ややきめが粗く粘性も強い。  
 ⑦: 黒色土 (Hue 10YR 1.7/1)。埋土中最も色が黒い。非常にきめ細かくさらさらとしており、やや粘性をもつ。  
 ⑧: 黑褐色土 (Hue 10YR 3/2)。Ahブロック (1 ~ 2cm角) や粒、にいへ黄褐色土 (Hue 10YR 4/2) の粒などが混じり合った状態で入っている。きめはやや粗く粘性も低いがその割にはよくしまっている。  
 ⑨: 土色や土の混じり具合は⑩と同じ。よりきめが粗くよりもなくボロボロとしている。  
 ⑩: [鉛床] 黑褐色土 (Hue 10YR 2/3) 固くしまっており、Ah粒を少量含む。  
 a: 黑褐色土 (Hue 10YR 2/2) きめ細かくよくしまっており、やや粘性をもつ。Ahブロック (1 ~ 2cm角) を少量含む。  
 b: 黑褐色土 (Hue 10YR 2/2) に暗褐色土 (Hue 10YR 3/5) がきめ細かくよくしまっており、粘性も高い。

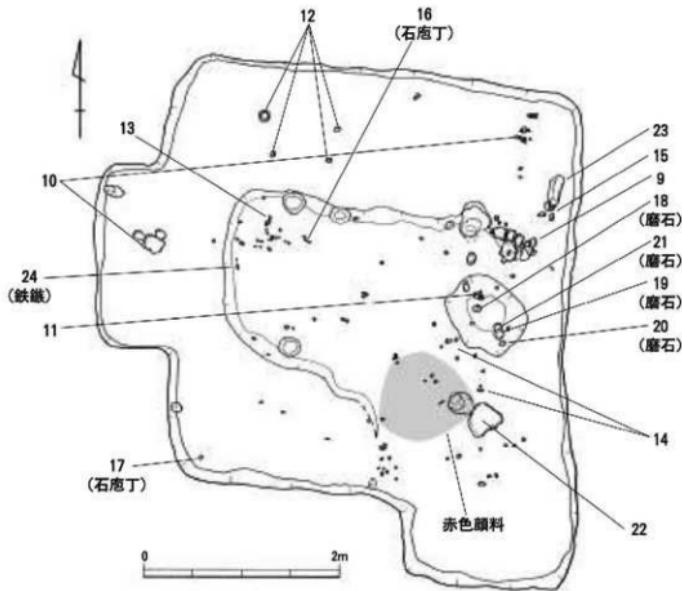
第11図 S A 1 実測図 (S = 1/50)

### 【床面】

床面は硬く縮まり、5 ~ 15cm程度の貼床が認められる。焼土の広がりや炉は検出していない。また、ベッド状の高まりが北部や西部では明瞭に見られる

ものの、南部から東部にかけて、緩やかに高低差が無くなる。

貼床を抜去すると、住居掘方が検出できた。地山はかなり凹凸をもって掘削されていた。



第12図 SA 1 床直上の遺物出土状況 (S = 1/50)

#### 【出土状況】(第12図)

遺物は、特に土器が①層上面から出土した。それより下層から床面直上にかけてはどの層からも満遍なく出土した。特に北東部に集中し、南部にかけて密度を薄くする状態であった。

床面直上の⑧層には、屋根材(垂木)と思われる炭化材が床面一面に広がって遺存していた。炭化材やそれを含んだ土を取り除くと床面直上の遺物が出土した。

また、中央やや東寄りに土坑(0.8m×0.7m)が1基検出され、中からは4点の磨石が出土した。

さらに、中央やや南東部から赤色顔料(酸化第二鉄)の微細な粒がおよそ1m四方の範囲で散在していることが確認された。

#### 【出土遺物】

##### (1) 床面直上の遺物 (第12~14図)

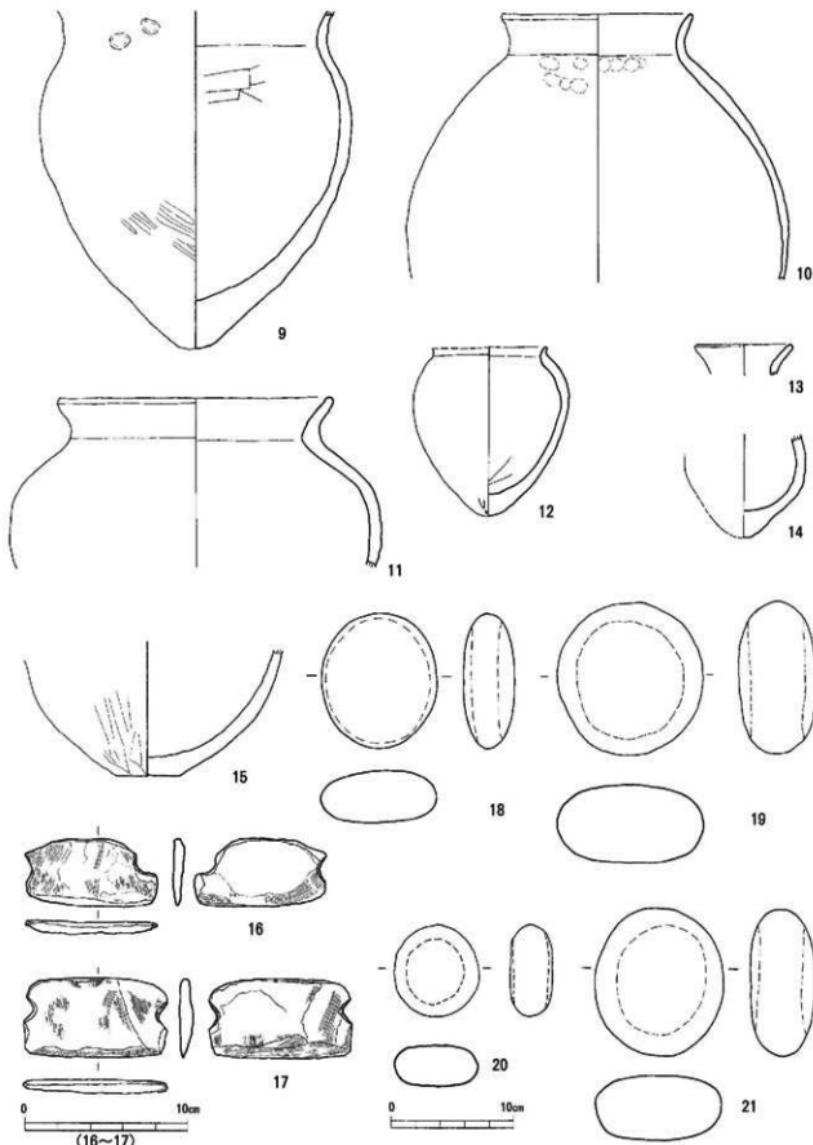
###### ①弥生土器

#### 壺 (第13図9)

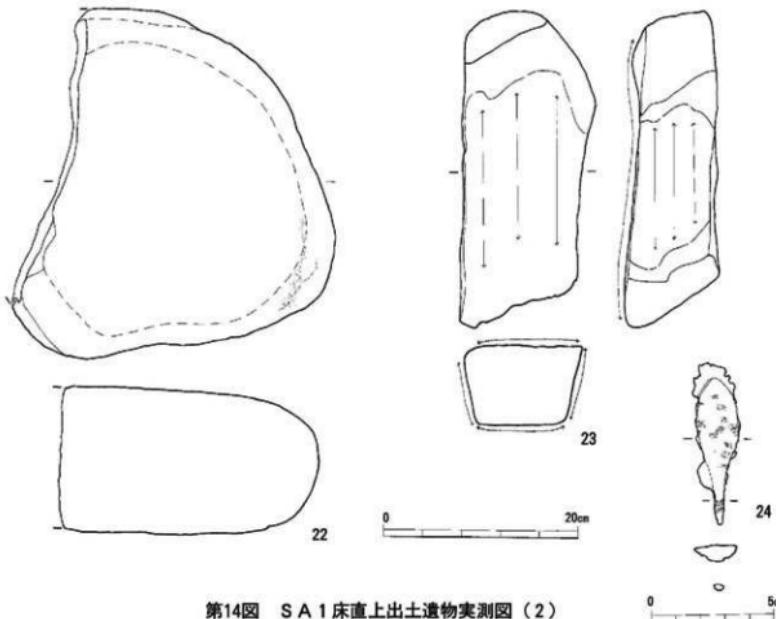
9は壺で、分散せずに破片がまとまって出土した。外面は、斜め方向のハケメの後ナデが施されている。底部は平底をわずかに残す丸底で、胴部全体にススの付着が見られる。特に胴部上方には濃いススの付着が確認される。

#### 壺 (第13図10~15)

10は短頸壺で、胴部上から頸部にかけて、外面、内面ともに指押えにより成形されており、胴部はナデが施されている。特に外面の胴部は丁寧なナデによる調整が施されている。11は短頸壺で、外面に縦、斜方向のナデが施されており全体的にススが付着している。内面は横、斜め方向に工具によりナデが施されている。12は無頸壺で、底部を上に向か伏せた状態のほぼ完形で出土した。外面は工具によるナデが施され、底部は丸底である。13は、小型の壺の口縁部である。14は丸底の壺で、ほとんどが床面直上



第13図 S A 1床直上出土遺物実測図(1)



第14図 S A 1 床直上出土遺物実測図（2）

出土遺物間で接合されたが、一部⑤層から⑧層中の出土遺物とも接合が見られた。底部内面に赤色顔料（酸化第二鉄）が僅かに付着している。なお、この小型壺の接合前の小片は、ほとんどが住居床面の赤色顔料集中箇所より北に0.4m以内の地点から出土した。従って、出土状況から赤色顔料（酸化第二鉄）を入れていた容器としての使用が想定される。15は、外面を工具による縱方向のナデが施され、筋状になっている。胸部には濃いススが付着している。底部は平底である。

#### ②石器（第13図16～21、第14図22～23）

16は中央やや西側部から、17は南西隅から出土した両端抉り入り石庖丁である。共に石材は、頁岩である。16は、両端抉りをしているが、抉りの上部に両端とも一部欠損が見られる。背部は平坦状に研磨を施し、刃部は鋭く丁寧に研磨を施す。17は、平面形態は長方形に近く、背部は舌状に丁寧な研磨を施し、刃部は鋭く丁寧な研磨を施す。抉りは表と裏

から丁寧に角が削り取られている。

18、19、20、21は磨石である。これらは土坑の埋土中からやや浮いた状態で出土した。全て凝灰岩の扁平な円錐状である。22は台石で、東側南部に出土した。一辺0.35mの隅丸三角形で石材は砂岩である。23は砥石で、東側北部に出土した。ややいびつな直方体で4面を研磨面として使用している。石材は砂岩である。

#### ③鉄器（第14図24）

24は鉄鎌で、西側のベッド状部分から出土した。三角形鎌で鎌身部が柳葉形に近い。鎌茎部には繊維がらせん状に巻き付けられた痕跡が良好に残る。鎌身部にも繊維質の付着が全体に確認される。

#### ④炭化材等

樹古環境研究所による樹種同定、放射性炭素年代測定、植物珪酸体分析を行った。その結果、S A 1 床面から採取された炭化材は、ツブライ（8）、シイ属（4）、サカキ（1）、ヤマガキ（1）と同定

された。放射性炭素年代測定の結果は、 $1820 \pm 40$ BP、 $1890 \pm 50$ BP、 $1900 \pm 50$ BPの年代値が得られた。これらの値は、同遺構の年代が弥生時代後期とする考古学的所見と整合している。なお、試料のサンプリング地点は第11図を参照されたい。

植物珪酸体分析は、貼床土とSA1出土の石庖丁(16)を試料として行った。貼床土では、メダケ節型やネザサ節型が多量に検出され、ミヤコザサ節型も比較的多く検出された。また、キビ属、ススキ属方、ウシクサ族Aなども検出された。以上のことから、SA1の貼床土の堆積当時は、メダケ属などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったと考えられる。石庖丁(16)については、刃部の顯微鏡観察で微細な使用痕跡が認められたため、これらを中心刃部全面について詳細な観察を行った。その結果、捕獲されたと考えられる植物珪酸体は認められなかった。

## (2) 埋土中からの遺物 (第15・16・17図)

### ① 弥生土器

#### 甕 (第15図25~35、第16図36~55)

25~55は甕である。25~30は、口唇部が舌状に薄く尖り、口縁部形態が緩やかに「く」字状に外反する。31は、底部が小さな平底で胴部最大径をくびれ部直下にもつ。32は、口縁部形態は緩やかに「く」字状に外反するが、口唇部にナデが施されており平面状を呈する。33、34、35は、口縁部形態は緩やかに「く」字状に外反し、35が胴部最大径をくびれ部直下にもち、口縁部径と胴部最大径がほぼ等しいのに対し、33、34は胴部最大径を胴部中央部にもち、胴部最大径が口縁部径を上回っている。さらに34の場合には、断面器厚が他の甕と比べて薄い。36は、口縁部が僅かに外反する。37は、口縁部が指押えによるあらい調整のため、ややいびつな形状を呈している。口唇部はナデが施されており平面状を呈している。38は、平底で外面をナデ調整、内面は斜め方向からのハケメ調整が施されている。39、40、41は、小型の甕である。39、40は、外面の胴部上部から口縁部にかけて指押えによる粗い調整が施されている。平底である。39は、底部がやや張り出しており、口

縁部断面幅が肉厚である。42は丸底の平底。43は内外面ともにナデ調整が施されている。44~47は、口唇部が舌状に尖っている。48~50は、口唇部が平面状を呈している。51~55は胴部片であるが、53~55は、外面にタタキ調整が施されている。

#### 壺 (第16図56~59、第17図60~67)

56~67は、壺である。56、57は頸部径が小さくやや長めの外反する口縁部をもつ。56は、一度上に延びてから外反する口縁部をもつ。58は、斜格子目の突帯が付いている。59は、頸部に幅広の突帯を貼り付け籠状工具により刻目を施している。内外面ともにハケメ調整が施されている。内面の肩部の調整は粗く粘土の継ぎ目が確認できる。60、61、62、63、64は、複合口縁壺である。60は、複合口縁部外面に櫛描波状文が施され、頸部下部に刻目突帯をもつ。61は、複合口縁部外面に櫛描波状文が施され大きく内傾する。62と63は複合口縁部外面に櫛描波状文が施されやや内湾ぎみに立ち上がる。64は、複合口縁部は剥離による欠損のため大きく外反する口縁部のみであり、内外面にハケメ調整が施されている。65と66は無頸壺である。66の口縁部には櫛描波状文が施されている。67は、丸底の壺である。

#### 鉢 (第17図68~75)

68~75は、鉢である。68と69は浅鉢。68の体部には縦方向の箇磨きが施されている。69は、底部が平底である。70~75は深鉢である。71~73は平底。75の底部は、尖底である。

#### 高坏 (第17図76)

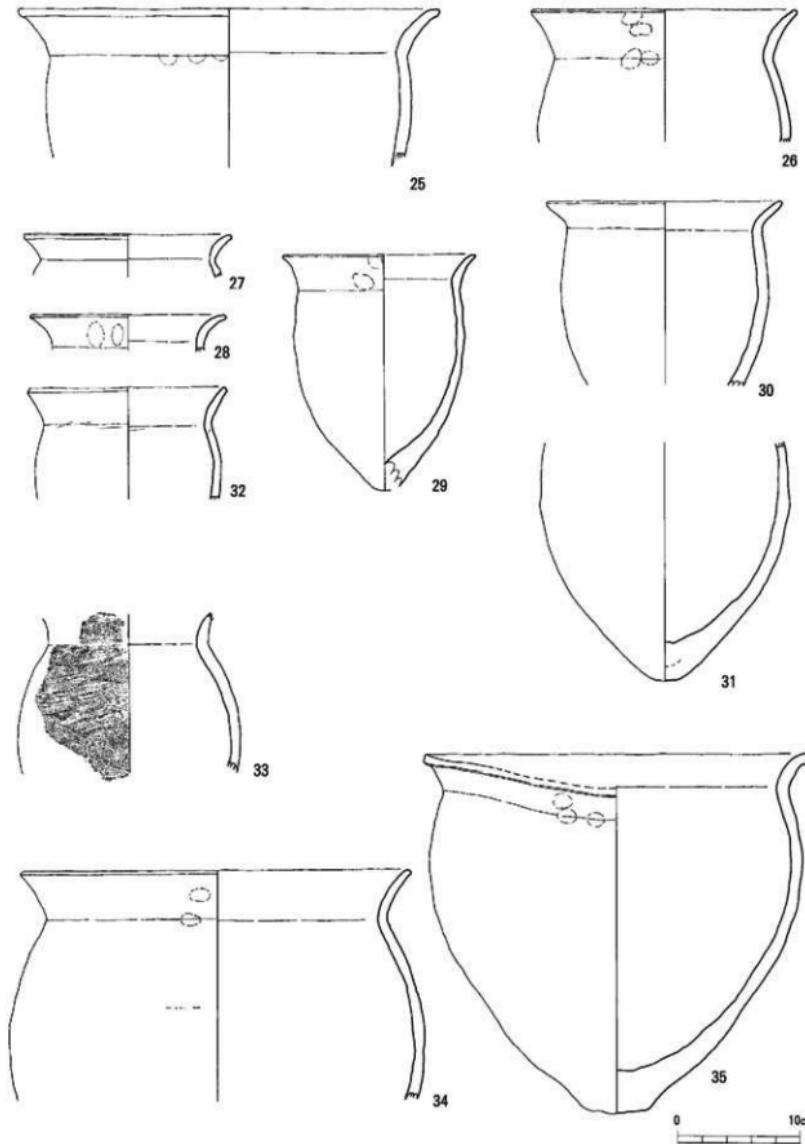
76は高坏の坏部で、一度屈曲し、外反しながら立ち上がる。

#### 器台 (第17図77~78)

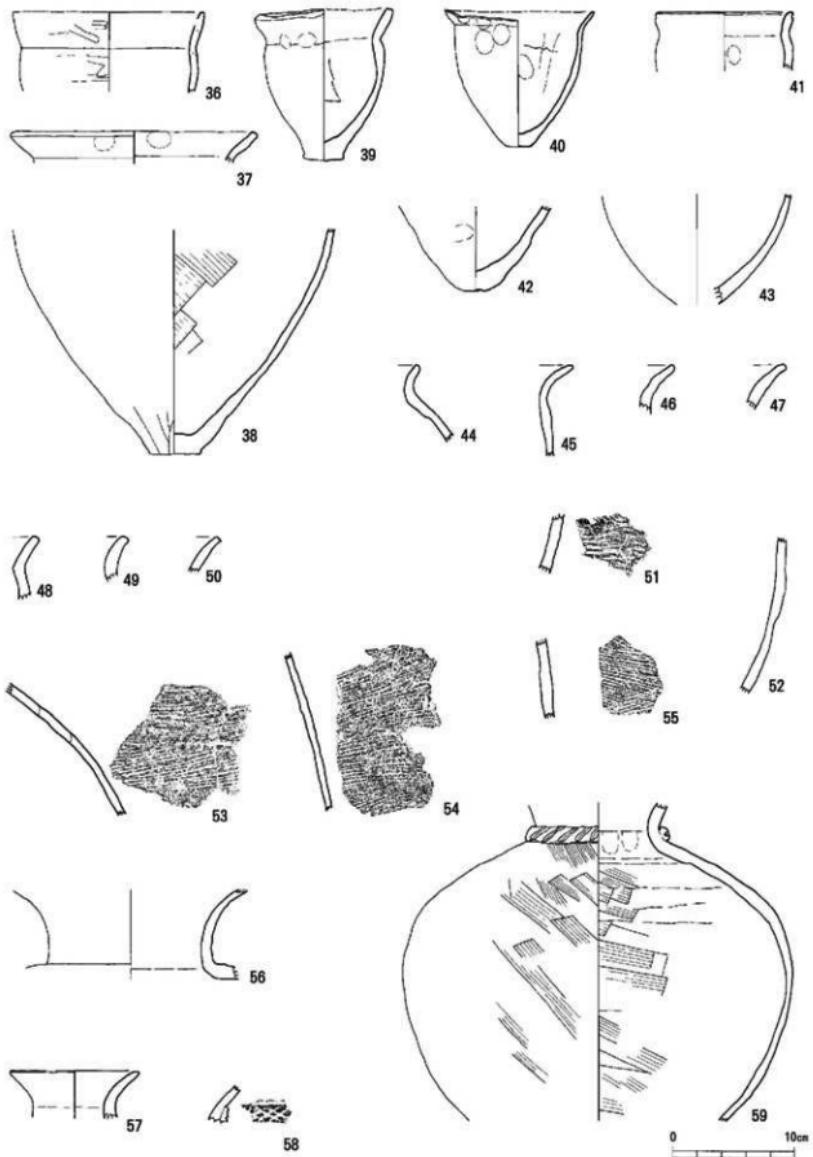
77と78は器台の脚根部である。78は、柱部から根部にかけて数個の円形透かしが施されているが、規則性はない。

#### ② 石器 (第17図79~83)

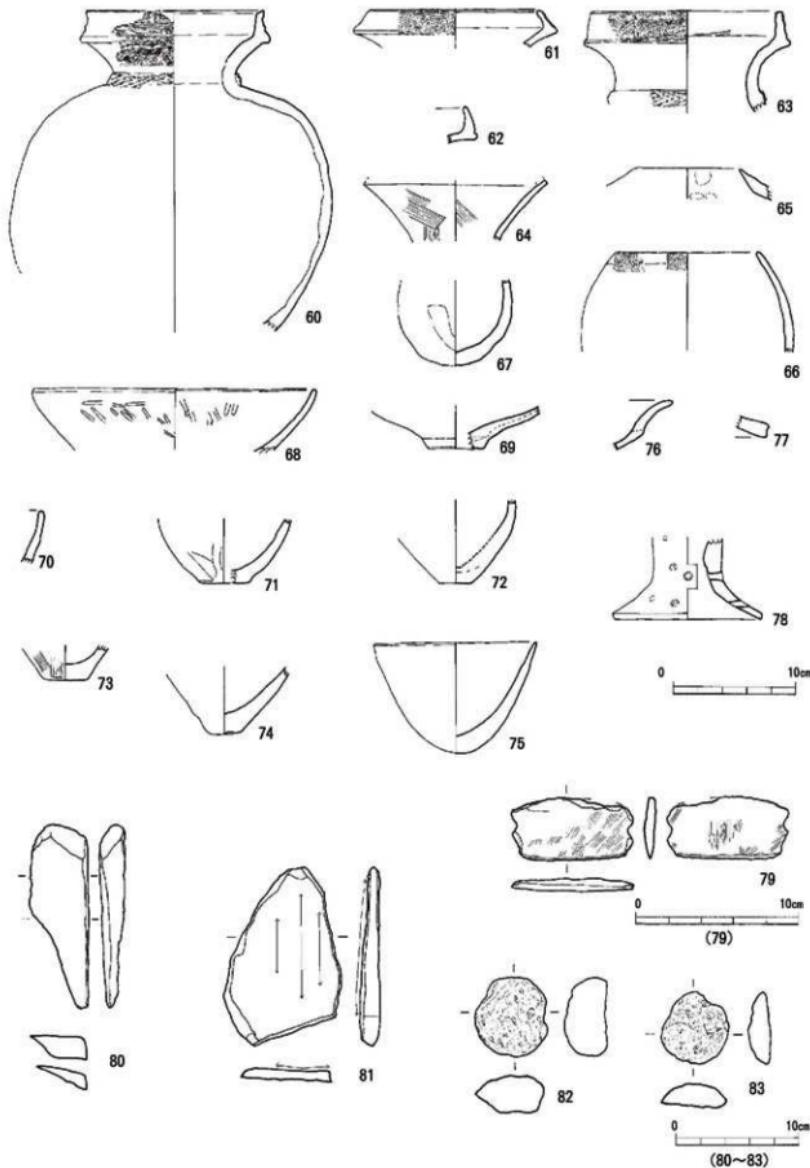
79は石庖丁で、両端抉りがあり床面から浮いた状態で出土した。粗い調整後に研磨を施し成形をしていると推察される。刃部は、丁寧な研磨を施す。80は、頁岩製の砥石である。現状では2面の研磨面をもっているが斜め方向への割れによって本来の形



第15図 SA 1 埋土出土遺物実測図（1）



第16図 SA 1 埋土出土遺物実測図 (2)



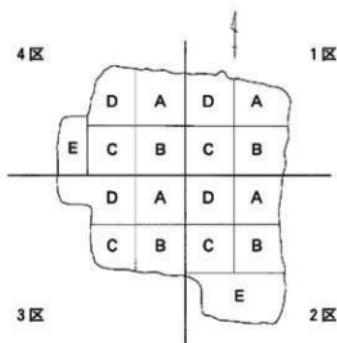
第17図 SA 1 埋土出土遺物実測図 (3)

状を留めていない。81は、砂岩製の砥石である。自然礫を加工せずに砥石に転用したと考えられる。82、83は、軽石である。数条の削痕が確認される。

### ③微細遺物等（図18図、第4表）

微細な遺物の検出を行うためにフローテーション法による土洗浄を行った。具体的には、床面直上の遺物取り上げ後、東西南北方向に軸線を設定し、第18図に示したとおり、時計回りに全体を1～4区の4区画に分割し、さらにそれぞれの区をA～DまたはEに分割した。一辺1～1.5m四方を単位にして全体を16分割して床面直上の埋土を探集し、その区ごとに洗浄を行った。

結果は、第4表のとおりである。なお、炭化材の中には、形状から判断して炭化種子と思われるものも僅かに含まれているが、現在のところ明らかにはできない。



第18図 S A 1 フローテーション法土洗浄用区割

第4表 S A 1 フローテーション法土洗浄結果

	1/A	1/B	1/C	1/D	2/D	2/E	3/A	3/B	3/C	3/D	4/A	4/B	4/C	4/D	4/E	出現箇所
炭化物	1.5	3.6	16.1	10.2	4.3	4.3	2.7	14.4	8.6	1.2	17.3	2.6	16.6	1.1	2.1	8/1158
石鉛石	0.4	0.1	0.1	0.2				0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	2/2
金屬?	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.2	0.1	2/7
レンガ瓦															0.1	0.4
その他	0.2				0.2	0.2	0.2	0.1			0.1					1/2

## 2 周溝状造構（S L）

### S L 1（第19図）

#### 【規模】

S L 1 の中軸線はほぼ東西南北方向を向いている。溝が方形に全周する造構でコーナー部は隅丸を呈す。規模は南北、東西軸長ともに4.9mを測る。周溝の内側台状部は、南北軸長3.7m、東西軸長3.9mを測る。周溝南西部隅の外側は一部削平されていた。また、東側全体はS E 42によって切られている。溝幅は0.6～0.8mを測り、断面長方形で検出面自体がアカホヤ面であるためか、深さ約0.1～0.2mとやや浅い。

#### 【造構内施設等】

柱穴は、周溝内北西隅の溝底面に1基確認された。直径0.2m、深さ0.24mで検出面上に周溝の埋土に含まれる弥生土器が出土しており、周溝と同時期か周溝よりも古いことが考えられる。従って周溝状造構に伴う柱穴かどうかは不明である。

その他、周溝の内側台状部に多数柱穴が検出されたが、柱穴の並びや埋土の状況から中世及び近世と判断され、周溝状造構に伴う建物として見いだすことはできなかった。

#### 【出土状況】（第20図）

検出面がアカホヤ層で、周溝の深さは最も深いところで0.2mであり、出土遺物のほとんどが、床面付近を中心としてほどまとまって出土した。器種は、弥生土器の高環、壺、甕、鉢が挙げられる。

北東部コーナーに石庖丁（96）が出土している。

南西部コーナーに高環の脚部（95）が出土し、南西部から南部にかけて高環の坏部（94）の小片が出土している。高環以外に他器種の土器が付近からは出土していないことから考えると同一個体の可能性が高い。

北西部コーナーと南東部コーナーには、壺、甕類が出土している。

#### 【出土遺物】（第20図）

##### ①弥生土器

###### 壺（第20図84～88）

84～88は甕である。84と85は、口縁部が緩やかに「く」字状に外反している。84は、内面に斜め方向

のハケメ調整が施してある。87と88の外面に箇磨きが施してある。

#### 壺(第20図89~91)

89、90、91は壺である。89は、頸部径が小さく直行気味にやや外傾する口縁である。90は、刻目貼付実帶をもつ。91は、底部は丸底で内面は工具による斜め方向の丁寧なナデが施されている。

#### 鉢(第20図92~93)

92は、底部がやや尖底ぎみの深鉢である。93は、底部が張り出しをもつ平底の深鉢である。

#### 高坏(第20図94~95)

94は、高坏の坏部である。屈曲点はあるが緩やかに外反する坏部形態である。内面には箇磨きが施してあり、体部と口縁部の境に一本の沈線と口縁部に沈線が施されている。95は、高坏の脚部である。脚

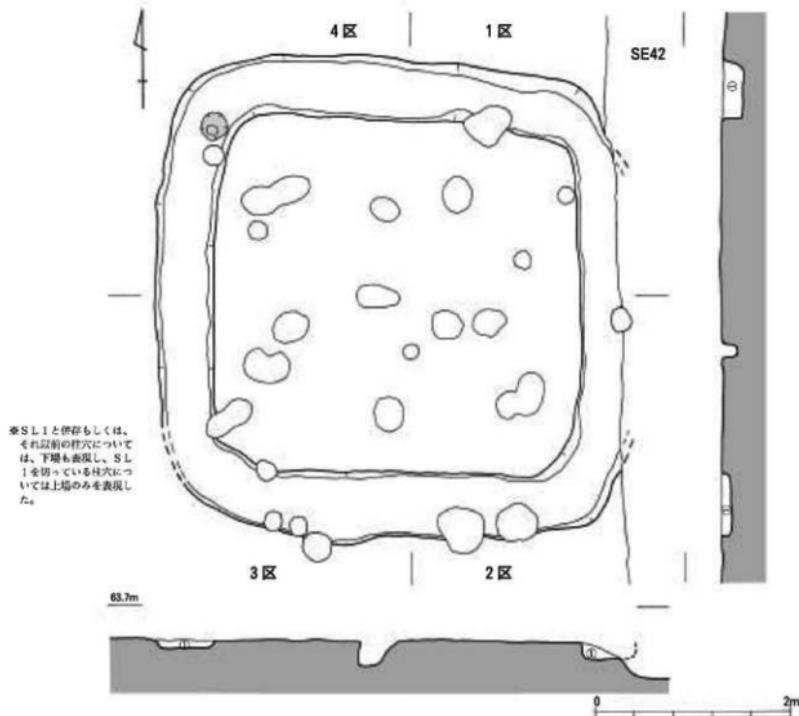
部の柱部のみの出土である。直立気味ながら据部に向かってわずかに開く形状だと考えられる。

#### ②石器(第20図96)

96は石磨丁で、両端に抉りがある。平面形態は長方形に近い。背部は簡単な研磨を施し、刃部は丁寧な研磨を施す。

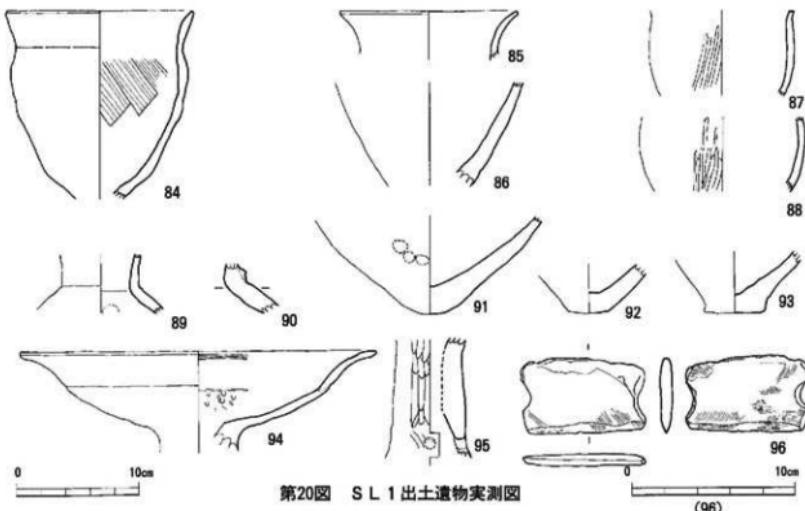
#### ③炭化種子等

周溝を南北軸と東西軸とで4区に区切り毎に床直の埋土を採取してフローテーション法土洗浄作業を行った。その結果炭化種子等が検出された。(株)古環境研究所に依頼して炭化種実同定を行った結果、炭化米では、イネ5(2:3区、3:4区)が同定され、炭化種子ではアワ3(4区)、イネ科1(3区)、タケ属1(4区)が同定された。その他自家同定を行った結果、新たにイネ26(22:1区、1:



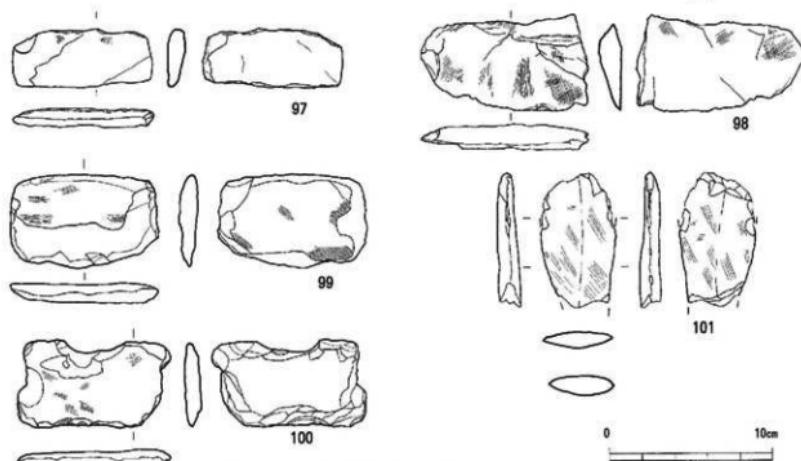
①: 黒色土(N2/0)。しまり、粘性共にやや強い。径1~5mmのアカホケ粒を少し含む。径1~2mmの炭化物をやや含む。

第19図 SL 1 実測図 (S=1/50)



第20図 S L 1 出土遺物実測図

(96)



第21図 弥生時代調査区内出土遺物実測図

2区、3:4区)、コムギ1(1区)、アワ3(4区)が同定された。

### 3 調査区内出土遺物 (第21図97~101)

97、98、99、100は、刃部らしきものは確認されるが、製品としての完成度が低いことから未製品の

石庖丁だと判断した。いずれも石材は頁岩である。

101は、頁岩製の磨製の石剣状石器である。裏表ともに中央に稜をもち丁寧な研磨が施され、左右に刃部が形成されている。上部と下部とが欠損しているが、形状から石剣状の石器であることが想定される。石材は、頁岩(緑色)である。

第5表 弥生土器観察表(1)

番号	種別	出土地点	長・幅・高	重量(g)			手造・植物・文様ほか		形・柄		出土の特徴	備考
				口沿	縁	底面	外縁	内縁	外底	内底		
9	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部						にふい縁	灰褐色	3cm以下で灰褐色地、1mm以下の黒褐色斑。	
10	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(15.4)			ナデ、黒斑	ナデ、指押え	にふい縁	灰褐色	4cm以下で灰褐色地、3cm以下での黒褐色地、1mm以下の黒褐色斑。	
11	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(22.2)			ナデ、スス	ナデ	黒縁	にふい縁	3cm以下で灰褐色地、黒褐色斑。	
12	弥生土器	SA 1	東 辺縁充完	9.4		13.8	工具ナデ、スス、黒斑	ナデ	にふい縁	灰褐色	3cm以下で灰褐色地、3cm以下での黒褐色地、1mm以下の黒褐色斑。	
13	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(7.8)			ナデ、黒斑	ナデ	にふい縁	灰褐色	3cm以下で灰褐色地、1mm以下の黒褐色地。	
14	弥生土器	SA 1	東 縁部～底部				工具ナデ、スス	工具ナデ、黒斑	明歩襷	灰褐色	4cm以下で灰、灰白、灰褐色地。	台形器(断面凸形)付着
15	弥生土器	SA 1	東 縁部～底部		5.05		工具ナデ、スス	工具底	にふい縁	灰褐色	3cm以下で灰白色地、5cm以下での黒褐色地、1mm以下の黒褐色斑。	
25	弥生土器	SA 1	東 口縁部～底部	(34.4)			ナデ、指押え	ナデ、工具ナデ	他	縁	3~5cmの白色地(少)、5cm以下で灰白色地(少)、1mm以下の黒褐色地(少)、1cm以下の黒褐色斑(少)。	
26	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(21.8)			ナデ、コピオサエ	ナデ	にふい縁	縁	3cm以下で灰白、乳白色地(少)。	
27	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(17.0)			ナデ	ナデ	にふい縁	にふい縁	4cm以下で灰白、褐色の粒(少)。	
28	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(15.0)			ナデ、指押え	ナデ	にふい縁	にふい縁	2cm以下で灰白、乳白色地(少)、1cm以下の黒褐色地(少)。	
29	弥生土器	SA 1	東 口縁部～底部	(15.0)			ナデ、指押え、スス	ナデ、指押え	にふい縁	明歩襷	4cm以下で灰白、灰褐色地(少)、1mm以下の黒褐色地(少)。	
30	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(19.2)			ナデ、スス	ナデ、黒斑	にふい縁	にふい縁	3cm以下で灰白、乳白、黑色地(少)。	
31	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(1.7)			ハケメ後ナデ	ナデ	にふい縁	赤褐色	1cm以下での白色地、2cm以下での黑色地(少)。	
32	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(18.4)			ナデ、スス	ナデ、黒斑	にふい縁	にふい縁	1.5~2cmの白色地(少)、2~2.5cmの黑色地(少)、1cm以下の黑色地(少)。	
33	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(18.2)			ナデ、スス	ナデ	にふい縁	にふい縁	1cm以下の白色地(少)、1cm以下の黑色地(少)、7cm以上の黒褐色片状(少)。	
34	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(32.0)			ナデ、指押え、スス	ナデ	にふい縁	赤褐色	2cm以下での黑色地、4cm以下での白色地。	
35	弥生土器	SA 1	東 口縁部～底部	(31.2)	4.4	29.25	ナデ、黒斑	ナデ、黒斑	にふい縁	にふい縁	1cm以下で灰白、乳白、黑褐色地(少)。	
36	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部				工具ナデ、黒斑	ナデ、工具底	にふい縁	にふい縁	2.5cm以下での黒褐色地、3cm以下での白色地。	
37	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(19.3)			ナデ、指押え	ナデ、指押え	にふい縁	にふい縁	1cm以下の白色地、黒褐色地(少)、2cm以下での灰褐色地(少)。	
38	弥生土器	SA 1	東 縁部～底部		4.1		ナデ、スス	ハケメ、ナデ、工具底	にふい縁	にふい縁	4cm以下で灰白、乳白、褐色の粒。	
39	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	11.3	3.4	12.4	ナデ、指押え、黒斑	ナデ、工具底	にふい縁	にふい縁	2cm以下での白色地(少)、5cm以下の白色地(少)。	小網の縫
40	弥生土器	SA 1	東 口縁部～底部	12.2	2.1	11.2	ナデ、指押え、黒斑	ナデ、指押え	にふい縁	にふい縁	4cm以下での白色地、3cm以下の黑色地(少)、5cm以下の白色地(少)。	小網の縫
41	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部	(10.8)			ナデ、工具底、黒斑	ナデ	にふい縁	にふい縁	1cm以下での乳白、灰褐色地(少)。	小網の縫
42	弥生土器	SA 1	東 縁部～底部		2.1		ナデ、指押え	ナデ	にふい縁	にふい縁	2cm以下での乳白、乳白、黑色地(少)。	
43	弥生土器	SA 1	東 縁部				ナデ	ナデ	灰褐色	にふい縁	2cm以下での白色地(少)、5cm以下の黑色地(少)。	
44	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部				ナデ、指押え、スス	ナデ、指押え	浅黄褐色	にふい縁	にふい縁	
45	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部				ナデ	黒化著しく不規	浅黄褐色	にふい縁	3cm以下での灰褐色地、灰褐色斑。	
46	弥生土器	SA 1	東 口縁部				ナデ、指押え、工具底	ナデ、指押え	黒	にふい縁	1cm以下での白色地(少)、1mm以下の黑色地(少)。	
47	弥生土器	SA 1	東 縁部				ナデ	ナデ	にふい縁	にふい縁	3cm以下での灰褐色地、黑色地(少)。	
48	弥生土器	SA 1	東 口縁部～頸部				ナデ、指押え、黒斑	ナデ、黒斑	暗灰	にふい縁	1cm以下での黑色地(少)、1.5cm以下の黑色地(少)。	
49	弥生土器	SA 1	東 口縁部				ナデ、黒斑	ナデ、黒斑	黒褐色	赤褐色	1cm以下での白色地(少)。	
50	弥生土器	SA 1	東 口縁部				ナデ、指押え、スス	ナデ、黒斑	にふい縁	にふい縁	1cm以下での白色地(少)、1mm以下の黑色地(少)。	
51	弥生土器	SA 1	東 縁部				タカキ、スス	ナデ	にふい縁	にふい縁	2cm以下での白色地(少)。	
52	弥生土器	SA 1	東 縁部				ナデ、黒斑	ナデ、黒斑	黒褐色	赤褐色	3cm以下での灰褐色地、乳白色地(少)。	
53	弥生土器	SA 1	東 縁部				タカキ、黒斑	黒化著しい	にふい縁	縁	2cm以下での灰褐色地、乳白色地(少)。	

第6表 弥生土器観察表(2)

番号	種別	出土地名	性 格 種 類	測量(cm)			手法・測定・文書記入			色 調		出土の寺跡	備考
				口徑	底径	高さ	外 形	内 形	外曲	内曲			
54	弥生土器	SA 1	東 頭部				タタキ、黒斑	ハケメ (黒化著しい)	汚黄	褐	2cm以下の乳白色地、乳白色地、褐色地(少)。		
55	弥生土器	SA 1	東 頭部				タタキ	黒化著しい	にふい黄	褐	2cm以下の乳白色地、乳白色地、褐色地(少)。		
56	弥生土器	SA 1	西 口縁部～頭部				ナデ	ナデ	褐	褐	4cm以下の乳白色地、乳白色地、褐色地(少)。		
57	弥生土器	SA 1	西 口縁部	(10.6)			ナデ	ナデ	褐地	にふい黄褐	3.5cm以下で白地、褐色、褐色の地(少)。		
58	弥生土器	SA 1	西 頭部				アメ 割み貝貼付突起	ナデ	浅黄褐	浅黄褐	4cm以下で、灰褐、褐色の地。		
59	弥生土器	SA 1	西 頭部～脚部				ハケメ、斜 面を作り貼付突 起、スヌ	ハケメ、斜押え	褐	にふい黄褐	4cm以下の灰地、灰褐、褐色 地と斜面の褐色地(少)。		
60	弥生土器	SA 1	西 口縁部～頭部				ナデ、 割み貝貼付突起	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	1cm以下の灰白色地、乳白色地、褐色地(少)。	複合口縁部	
61	弥生土器	SA 1	西 口縁部	(13.8)			崩壊状況、 ナデ、黒斑	ナデ、黒斑	浅黄褐	浅黄褐	2cm以下の灰白色地、乳白色地、褐色地(少)。	複合口縁部	
62	弥生土器	SA 1	西 口縁部				崩壊状況文、 ナデ	ナデ	褐	浅黄褐	2cm以下のにふい黄褐色、 褐色地(少)。	複合口縁部	
63	弥生土器	SA 1	西 口縁部～頭部	(15.7)			崩壊状況文、 割み貝貼付、ナデ	ナデ	にふい褐	にふい黄褐	1cm以下の乳白色地(少)。	複合口縁部	
64	弥生土器	SA 1	西 頭部	(14.6)			ナデ	ハケメ、黒斑	浅黄褐	浅黄褐	2cm以下の灰褐、灰褐色地(少)。	複合口縁部	
65	弥生土器	SA 1	西 頭部				ナデ	ナデ、斜押え	浅黄褐	灰褐	3.5cm以下で灰褐、灰褐色、 褐色地(少)。		
66	弥生土器	SA 1	西 口縁部～頭部	(11.6)			崩壊状況文、 ナデ	割離 (黒化著しい)	にふい黄褐	にふい黄褐	1cm以下の灰白色地(少)。	以下で乳白色地(少)。	
67	弥生土器	SA 1	西 頭部～底部				工具でナデた後 指ナデ	ナデ	灰黄褐	にふい黄褐	3cm以下で灰白、乳白、褐色 地(少)。		
68	弥生土器	SA 1	外 口縁部～頭部	(22.8)			ヘラミガキ、 黒斑	ヘラミガキ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下の灰褐、褐色地(少)。		
69	弥生土器	SA 1	外 口縁部～頭部	(4.7)			ナデ、黒斑	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	1cm以下の灰白、褐、黑色地 (少)。		
70	弥生土器	SA 1	体 口縁部				ナデ	ナデ、黒斑	にふい褐	にふい赤褐 (少)	1cm以下の丸乳、褐色地 (少)。		
71	弥生土器	SA 1	体 頭部～底部	(3.8)			ナデ、斜ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下の灰褐、灰褐色地 (少)。		
72	弥生土器	SA 1	体 頭部～底部	2.55			丁寧なナデ、 黒斑	ナデ、黒斑	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下の灰白色地(少)。 1cm以下の乳白色(少)。		
73	弥生土器	SA 1	体 頭部～底部	(3.4)			ハケメ、黒斑	ナデ、黒斑	にふい褐	黑褐	2cm以下の乳白色地(少)。		
74	弥生土器	SA 1	体 頭部～底部	(2.6)			ナデ	ナデ	浅黄	黃灰	2cm以下の灰白色地、1cm 以下の乳白色地(少)。		
75	弥生土器	SA 1	口縁部～底部	13.1	2.4	9.1	ナデ、工具痕	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	3cm以下で灰褐、灰白、褐、 黑色地(少)。		
76	弥生土器	SA 1	高 坏(口縁)				ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、乳白、 黑色地(少)。		
77	弥生土器	SA 1	器台 腰部				ナデ	ナデ	にふい褐	浅黄褐	2cm以下で灰褐、褐色、褐色 の地。		
78	弥生土器	SA 1	器台 腰部				ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、褐色、褐色 の地。		
79	弥生土器	SL 1	東 口縁部～底部	(15.4)			ナデ	ナデ、 斜押え	にふい黄褐	にふい黄褐	4cm以下の乳白色地(少)。 1cm以下の乳白色地(少)。		
80	弥生土器	SL 1	東 口縁部	(14.6)			ナデ	ナデ	にふい褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、褐色地(少)。		
81	弥生土器	SL 1	東 頭部				タタキ後ナデ、 黒斑	ナデ	黑褐	黑褐	1cm以下の乳白色地。2cm 以下の乳白色地(少)。		
82	弥生土器	SL 1	東 頭部～脚部				ミガキ、黒斑	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	薄褐色～2cmの乳白色地 (少)。1cm以下の乳白色地(少)。		
83	弥生土器	SL 1	東 頭部				ミガキ、黒斑	工具ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、白地、黄白 地。		
84	弥生土器	SL 1	東 口縁部～底部	(15.4)			ナデ	ナデ、 斜押え	にふい黄褐	にふい黄褐	4cm以下の乳白色地(少)。 1cm以下の乳白色地(少)。		
85	弥生土器	SL 1	東 頭部				ナデ	ナデ	にふい褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、褐色地(少)。		
86	弥生土器	SL 1					タタキ後ナデ、 黒斑	ナデ	黑褐	黑褐	1cm以下の乳白色地。2cm 以下の乳白色地(少)。		
87	弥生土器	SL 1	東 頭部～脚部				ミガキ、黒斑	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	薄褐色～2cmの乳白色地 (少)。1cm以下の乳白色地(少)。		
88	弥生土器	SL 1	東 頭部				ミガキ、黒斑	工具ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、白地、黄白 地。		
89	弥生土器	SL 1	東 頭部				ナデ	ナデ、 斜押え	にふい褐	にふい黄褐	2cm以下で灰褐、白地、黄白 地。		
90	弥生土器	SL 1	東 頭部				ナデ、 割離貼付け突起	ナデ	にふい褐	にふい黄褐	2cm以下の乳白色地(少)。		
91	弥生土器	SL 1	東 頭部～底部				ナデ、 斜押え	ていねいな工具 ナデ黒斑	にふい黄褐	にふい黄褐	3cm以下の乳白色地(少)。 1cm以下の乳白色地(少)。		
92	弥生土器	SL 1	体 頭部～底部				ナデ	工具ナデ	褐	にふい褐	4cm以下の乳白色地。5cm 以下の乳白色地(少)。		
93	弥生土器	SL 1	体 頭部～底部				ナデ、黒斑	ナデ	黑褐	黑褐	2cm以下の乳白色地。5cm 以下の石質。		
94	弥生土器	SL 1	高 体 長 部	(28.7)			ナデ		にふい褐	にふい褐	1cm以下の灰褐、灰褐色地、 1cm以下の乳白色地(少)。		
95	弥生土器	SL 1	高 体 長 部				ミガキ、 斜押え	ナデ	にふい黄褐	にふい褐	2cm以下の灰褐色地(少)。 1.5cm以下の乳白色地(少)。		

第7表 弥生時代鉄製品観察表

番号	器種	出土地名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
24	3足	SA1床面上	8.5	2.6	1.2	5.5	鷺羽ぬり	

第8表 弥生時代石器観察表

番号	器種	出土地名	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
16	石酉丁	SA1床面上	4.1	8.1	0.7	34.0	青石	
17	石酉丁	SA1床面上	4.9	8.8	0.5	53.4	青石	
18	磨石	SA1床面上	11.0	9.1	4.2	878.7	磨灰石	
19	磨石	SA1床面上	13.5	11.6	8.3	1411.5	磨灰石	
20	磨石	SA1床面上	7.8	7.6	2.4	266.5	磨灰石	
21	研石	SA1床面上	12.1	9.6	8.3	1040.1	磨灰石	
22	刮石	SA1床面上	38.7	33.2	14.5	2800.0	砂岩	
23	研石	SA1床面上	32.2	14.6	9.7	879.0	砂岩	
24	石酉丁	SA1甌土	3.9	7.5	0.7	25.0	青石	
80	磨石	SA1甌土	15.0	4.6	2.0	129.7	青石	
81	研石	SA1甌土	14.7	9.7	1.2	217.5	砂岩	
82	?	SA1甌土	8.5	8.9	3.4	26.1	研石	
83	?	SA1甌土	5.9	5.6	1.9	5.5	研石	
84	石酉丁	SL1側溝	4.7	7.6	0.6	42.8	黑石	
87	石酉丁	2区	3.5	6.6	10.5	91.9	黑石	
88	石酉丁	2区	5.9	10.2	1.5	93.0	青石	
89	石酉丁	2区	9.1	5.8	1.2	87.2	青石	
90	石酉丁	2区	9.4	8.4	1.0	75.5	青石	
91	石劍状石器	2区	9.3	4.7	1.3	89.8	武羽(?)	

## 第5節 中世～近世の遺構と遺物

中世から近世の遺構として確認されたものは、区画溝16、溝状遺構57条、掘立柱建物52棟、土坑28基、土壙3基、石組遺構1基、道路状遺構3条である。区画溝、溝状遺構については、かなり時期差が見られる遺物が出土しており、その時期認定は不明瞭である。

遺構内出土遺物は、土師皿、陶器、磁器、錢貨等が出土した。その他調査区内より銅製品（煙管）、錢貨、輸入陶磁器、火打ち石等が出土した。

以下、中世から近世の遺構・遺物についてその内容を報告する。なお、中世～近世の遺構分布については第5図を参照して頂きたい。また、遺物に関しては、紙幅の関係もあるため要略を紹介するに留める（第77～81表参照）。

### 1 区画溝（第22～29図）

検出した溝状遺構の内、L字形またはコの字形に溝がめぐり、一定の敷地を閉むように配置している溝を確認することができた。

これらの溝は、比較的幅が狭く浅い。また、軸がほぼ東西、南北線上にあるものが多いという特徴をもつ。溝が狭く浅いことから、防御的な性格を持った溝というよりは、敷地を区画するための溝である可能性が高いと考えられる。また、ある程度一定の軸にそって配置されていることから、当初から意図的に溝として作られた施設であることが考えられる。

以上のことから、溝が一定の空間を囲むように配置されている溝については、区画溝として認定した。

#### 区画溝1（第22・23図）

区画溝1は1区南東部に位置し、S E 29・S E 30から成る。S E 30は、S E 29からするとやや方向が振れていますが、溝の形状や方向性から判断しS E 29との関連性が強いと判断し、区画溝1を構成する溝として認定した。S E 29は東から西に約11m延び約80°の角度で北に屈曲した後、約7m延びる。S E 30は、S E 29の延長線よりも東に1m前後軸をずらし北方向に約8m延びて調査区外へと続く。溝の底面はS E 29、S E 30共に南から北に向かって低くな

っている。区画内にピットは検出したが、掘立柱建物としての並びは確定できなかった。

S E 29は上面幅0.8～1.3m、深さ0.1～0.25mで、断面形は船底形を示す。溝の傾斜は、内側が緩やかで外側がやや急である。埋土は自然堆積である。

遺物は、近世の陶磁器小片数点のみである。他遺構との重複はない。

S E 30は上面幅0.8～1.3m、深さ0.31～0.4mで、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。遺物は中世の磁器1点のみである。他遺構との重複はない。

#### 区画溝2（第22・23図）

区画溝2は2区北東部に位置し、S E 15から成る。東側調査区壁面付近で区画溝3（S E 14）との交錯が見られるが、土層断面からは、区画溝2と区画溝3との新旧関係は明らかにできなかった。

S E 15は、東側壁面中央や上部から西に約30m横断した後、約90°北へ屈曲して約4m延び徐々に浅くなる。溝の東端部の方向から考えて、東側調査区外へ続いている可能性が考えられる。溝の底面は東側壁面付近がやや低いものの高低に一定の方向性はない。上面幅0.4～1.2m、深さ0.15～0.34mで、断面形は船底形ないし逆台形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。区画内には多数のピットが検出されたが、掘立柱建物の並びは確定できなかった。遺物は中世から近世にかけての陶磁器類の小片が僅かに出土している。S E 14と重複するが、切り合は不明である。

#### S E 15出土遺物（第34図102、103）

102は龍泉窯系青磁碗である。全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取っている。

103は東播系の捏鉢である。

#### 区画溝3（第22・23図）

区画溝3は2区北東部に位置し、S E 14から成る。S E 14は北東側調査区外から途中S E 15と交差しながら南西に約9m延びた後、西に約20m区画溝2と並走する。その後、約3m途切れた後再び約5m延

びる。溝の底面は、若干の高低差はあるものの高低に一定の方向性は無い。上面幅0.5~1.3m、深さ0.5~0.27mで、断面形は逆台形を示す。壁面の傾斜は、緩やかである。埋土は自然堆積である。区画内には、多数のピットを検出したが、掘立柱建物の並びは確定できなかった。遺物は、中世から近世にかけての陶磁器の小片が僅かに出土している。S E 15と重複するが、切り合は不明である。

#### 区画溝4（第22・23図）

区画溝4は2区北部に位置し、S E 13・S E 18から成る。区画溝2と5m程の間隔をおいて南側に並走する。南辺がS E 13、西辺がS E 18という構成である。S E 13とS E 18との間に約2mの陸橋部が存在する。溝の底面は、南辺は若干の高低差はあるものの、高低に一定の方向性は無い。西辺は北から南に向かって低くなる。区画内に多数のピットを検出したが、掘立柱建物の並びは確定できなかった。

S E 13は、東壁面付近から西に約35m延びる。上面幅0.6~0.8m、深さ0.04~0.36mで、断面形は船底形ないし逆台形を示す。壁面の傾斜は、内側、外側共に急である。埋土は自然堆積である。遺物は、中世から近世にかけての陶磁器片が出土している。石組遺構と重複するが、切り合は不明である。

S E 18は、2区北部中央やや西から1区調査区へむけて北北西へ約13m延びる。上面幅0.5~0.9m、深さ0.1~0.22mで、断面形は逆台形状を示す。溝は浅く壁面の傾斜は、緩やかである。埋土は自然堆積である。遺物は、土器小片と中世の陶磁器の小片が僅かに出土している。他遺構との重複はない。

#### S E 13出土遺物（第34図104）

104は備前焼の擂鉢である。

#### S E 18出土遺物（第34図105）

105は常滑焼の壺の口縁部である。口縁部の断面は二重に折り返され、N字状を描く。

#### 区画溝5（第24・25図）

区画溝5は、2区南半部から3区北上部を囲むよ

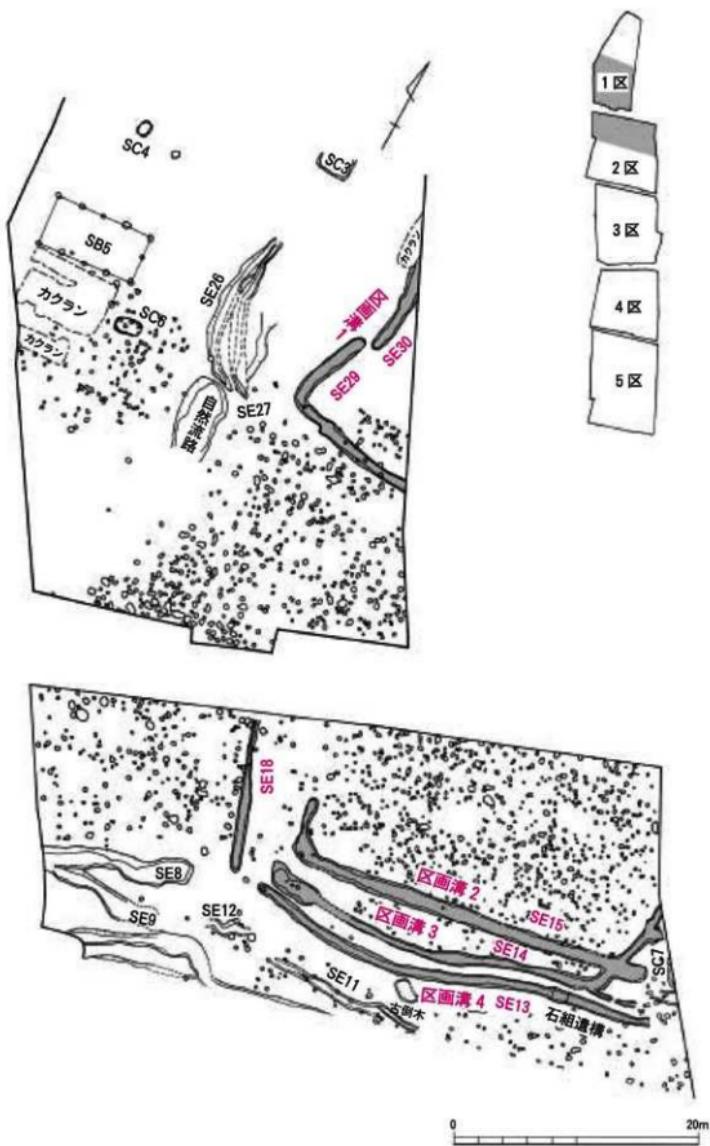
うに位置し、S E 3・S E 7・S E 1から成る。北辺がS E 3とS E 7、東辺がS E 1という構成である。西壁面中央から東へ約50m延び約90°南へ屈曲して約35m延びる。溝の底面は、北辺は西から東に低く、東辺は高低に一定の方向性はない。東辺は約39mである。区画内の掘立柱建物は、S B 6~27である。

東辺を構成するS E 1について、若干の説明を加えたい。S E 7は検出時、平面プランから東端部内側が南方向へ屈曲することが確認された。このことから判断すると、北辺は西から東へ向けてS E 3、S E 7と続き、S E 7の続きが東辺を構成していたものと考えられる。しかし、東辺の位置にある南北方向に直進するS E 1の土層断面からは、S E 7の埋土は確認できなかった。おそらく、S E 1がS E 7全体を切っていることが想定される。そこで、S E 1は、もともとそこに存在していたであろう区画溝5の東辺を再掘削した溝と考え、区画溝5の東辺を構成する溝としてここで説明することにした。

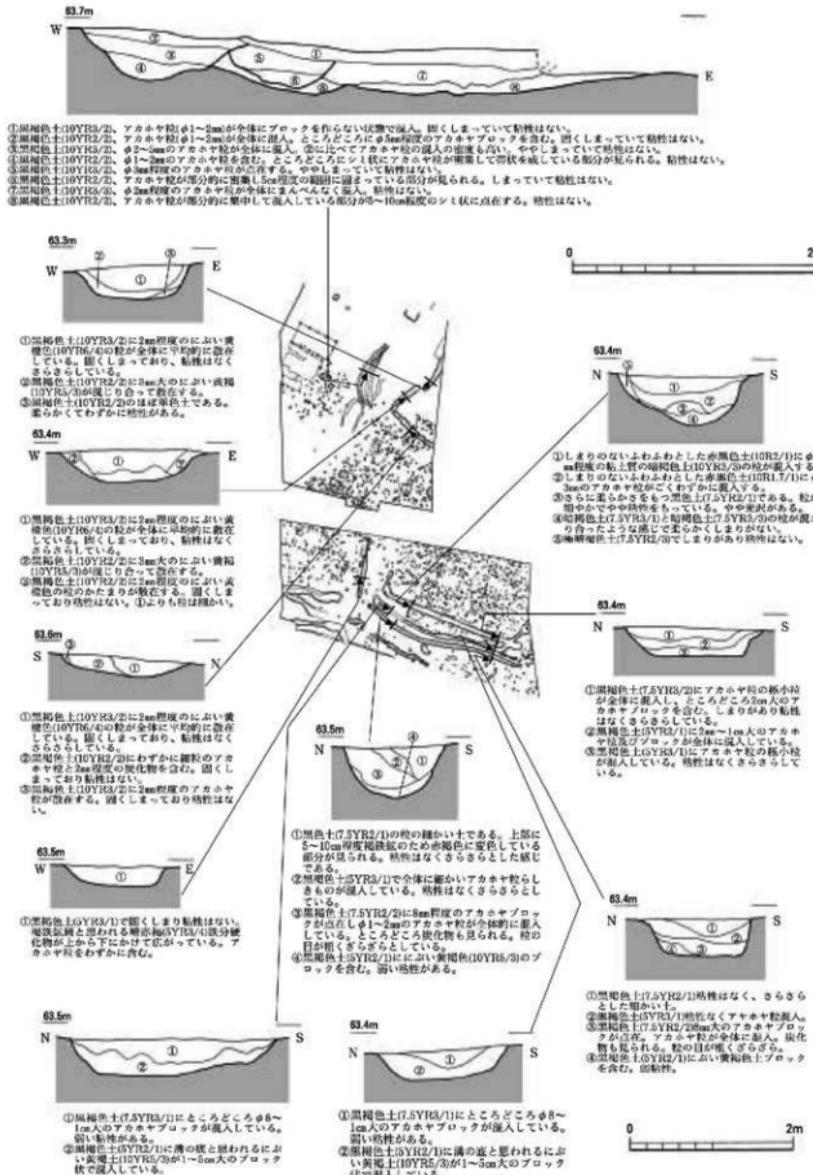
なお、S E 2は、S E 3と切り合ながら並走しており、出土遺物や方向から性格の似た溝だと判断される。また、S E 6は、S E 2の流れをくむものだと判断される。そこで、S E 2についてこの項で説明をするとともに、S E 6の出土遺物についても触ることにする。

S E 3は、上面幅0.9~1.8m、深さ0.03~0.1m、断面形は船底形で、埋土は自然堆積である。壁面の傾斜は、緩やかである。底面は西から東に低くなっている。遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器類が出土しており、特に近世後半の陶磁器が多い。S E 3はS E 2、S E 5、S E 6、S C 9と重複する。S E 2を切り、S E 5、S C 9に切られる。S E 6との切り合は不明である。

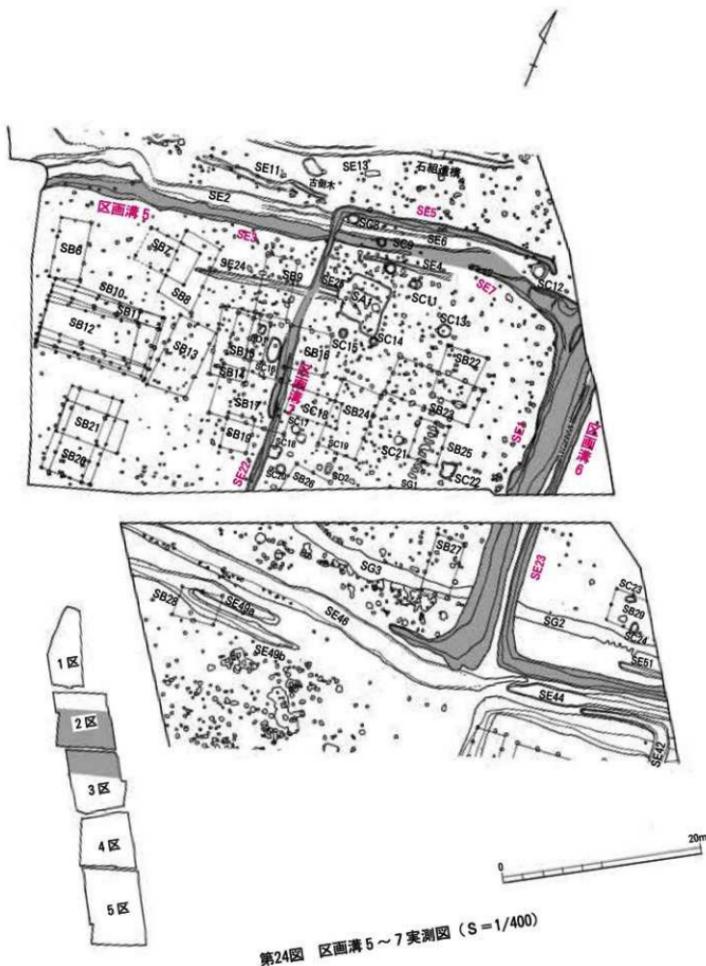
S E 7は、底面が西から東に向かって急激に低くなり、内側が南方向へ屈曲し、南北に直進するS E 1と切り合っている。断面形は、船底形であり、埋土は自然堆積である。遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器類が出土しており、特に近世の陶磁器類が多い。S E 1と重複し、S E 1に切られる。S E 23、S G 1、S G 2と重複し、全てを切る。

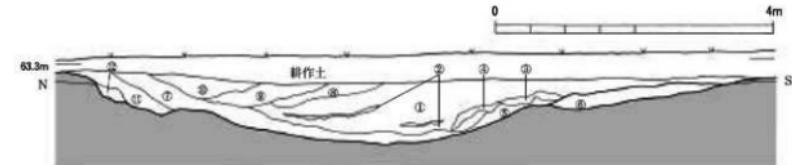


第22図 区画溝1~4実測図 ( $S=1/400$ )



第23図 区画構1~4及びS E 26・27土層図





①黑褐色土(7.5YR2/6)堅くしまり、粘性あり。褐色(10YR2/4)の粒(φ2~5mm)を含む。黒色(10YR2/1)をわずかに含む。

②砂質土(明褐色7.5YR2/6)、洗浄(2.5Y7/4)

③黑褐色土(7.5YR2/6)柔らかく、粘性あり。褐色(10YR4/4)の粒(φ2~5mm)を多く含む。黒色(10YR2/1)とAh段(φ2~5mm)を含む。

④明褐色土(7.5YR2/6)、圓くしまり、粘性あり。黒色(2.5Y3/1)をわずかに含む。

⑤砂合土(明褐色7.5YR2/1)、褐色(10YR4/4)、Ah段(φ5mm)、褐色(10YR2/6)をわずかに含む。やや固くしまり、粘性なし。

⑥黑褐色土(7.5YR2/6)、やわらかく、粘性あり。褐色(10YR4/4)、φ1cmを少し含む。底の方に層(削りしているもの、円錐、溶化しているもの)が流れ込んでいる。

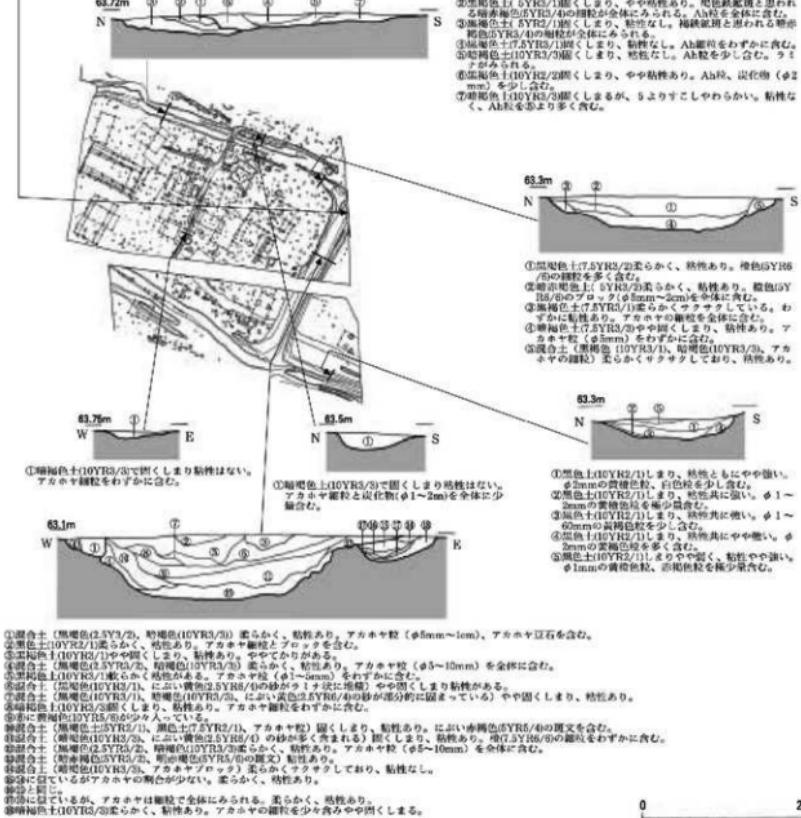
⑦黑褐色土(7.5YR2/6)柔らかく、粘性あり。褐色(10YR2/1)、Ah段(φ1~3cm)を全体に含む。溶化物(φ5mm)をわずかに含む。

⑧砂合土(明褐色7.5YR2/6)、Ah段(φ5mm)を多く含む。溶化物(φ5mm)を含む。

⑨砂合土(7.5YR2/6)、圓くしまり、粘性あり。褐色(10YR2/1)のブロックの割合が多い。

非耕作地土(HYRK3/1) やや固くしまり、粘性あり。灰色がかったAh段(φ2mm)をわずかに含む。

非耕作地土(7.5YR2/1) 坚くしまり、粘性あり。Ah段(φ5~10mm)を含む。褐鐵鉄とと思われる赤褐色(10YR2/6)、φ2~5mmを含む。



第25図 区画溝5~7土層図

SE 1は、全長約35mを測り、北端部は2区東壁面の調査区外へと続く。南端部は、底面が僅かに東から西に向かって高くなりながら約6m延びる。上面幅0.8~3.5m、深さ0.21~0.77m。断面形は船底形である。埋土からは複数の掘り直しが行われたことが確認される。また、SE 23との切り合い関係がみられ、SE 1がSE 23を切る関係にある。遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器であるが、特に近世陶磁器の占める割合が高い。

SE 2は、SE 3と切り合い関係にあり、SE 3がSE 2を切る。上面幅0.8~2m、深さ0.01~0.2m、断面形は船底形である。埋土は自然堆積である。底面は、西から東に低くなっている。遺物は、土器小片と中世から近世の陶磁器が出土している。SE 3、SE 5、SE 6と重複する。SE 3、SE 5に切られる。SE 6との切り合いは不明である。

#### SE 3出土遺物（第34・35図106、109、113、116~120、126、127、129）

106は、龍泉窯系青磁碗である。体部に粗い蓮弁文が施されている。

109は、龍泉窯系青磁皿である。見込に双魚文のスタンプが施され、体部には蓮弁文が施されている。

113は、中国産の擂鉢である。胎土が非常に細かく焼成は堅緻である。擂目は8条を単位としている。

116は、溝縁皿である。

117は、瀬戸・美濃の天目茶碗である。

118、119は、器種不明の陶器である。同一個体だと考えられる。

120は、初期伊万里である。

126は、京焼風陶器皿である。見込には樓閣山水文が描かれ、高台内には「清水」の印銘を施す。

127は、刷毛目が施された碗である。見込は蛇の目釉剥ぎが施されている。見込と高台に重ね焼きによる砂が熔着している。SE 7と接合関係にある。

129は、刷毛目が施された鉢である。SE 7と接合関係にある。

#### SE 7出土遺物（第34・35図112、114、123、128、133）

112は、備前の擂鉢である。口縁の外面に凹線をめぐらし、僅かに自然軸がかかり、赤褐色に焼き締まっている。

114は、東播系の捏鉢である。

123は、京焼風陶器色絵皿である。見込には色絵による文様が描かれ、高台内に印銘を施した様子が僅かに観察される。

128は、刷毛目の皿である。見込には釉剥ぎが施され、僅かに重ね焼きの痕跡が残る。

133は、産地不明の擂鉢である。

#### SE 1出土遺物（第34・35図108、110、121、122、124、125、130~132、135）

108は、龍泉窯系青磁皿である。見込に花文スタンプが施されている。高台は疊付から外底にかけて無釉である。

110は、景德鎮窯青花皿である。

121は、初期伊万里の皿である。

122は、広東碗である。

124は、京焼風陶器皿である。見込に樓閣山水文が描かれ、高台内に印銘を施す。

125は、内野山窯系の皿である。見込には蛇目釉剥ぎが施され、3個の砂目が熔着している。疊付にも砂目痕が僅かに残る。

130は、刷毛目皿である。見込には蛇目釉剥ぎが施されている。

131は、産地不明の碗である。見込には蛇目釉剥ぎが施され、重ね焼きの痕跡を残す。

132は、産地不明の壺である。外面に回転ナデ、内面にタキが施されている。SE 7と接合関係にある。

135は、堺系の擂鉢で擂目は8条を1単位とする。

#### SE 2出土遺物（第34図107、111）

107は、龍泉窯系青磁碗である。全面に施釉後、外底の釉を輪状に削りとっている。見込中央には花文スタンプが施されているが、その周りには輪状に釉がはぎ取られている。

111は、備前の擂鉢である。

### S E 6 出土遺物（第34・35図115、134）

115は、陶器皿である。低い削りだし高台である。  
134は、産地不明の擂鉢である。

### 区画溝6（第24・25図）

区画溝6は2区南東部隅から3区北東部隅に位置し、S E 23から成る。3区東壁面北部から西に約17m延び、約90°北へ屈曲して約30m延びた後、2区東壁面調査区外へと続く。区画内の掘立柱建物はS B 29である。S E 23は、S E 1との切り合い関係があり、S E 1がS E 23を切る関係にある。溝の底面は、顕著な高低差は認められない。上面幅0.9~1.7m、深さ0.11~0.23mで、断面形は船底形を示す。溝は浅く壁面の傾斜は、緩やかである。埋土は自然堆積である。遺物は、近世の陶磁器が僅かに出土している。S E 1、SG 1、SG 2と重複する。SG 1、SG 2を切り、S E 1に切られる。

### S E 23出土遺物（第35図136、137）

136は、備前の擂鉢である。  
137は、陶器碗である。高台部分がやや外に開く。

### 区画溝7（第24・25図）

区画溝7は2区南東部を開むように位置し、S E 22・S E 5から成る。2区南壁面中央部から北に約30m延び、約90°東へ屈曲し約23m延びた後、僅かに南へ屈曲傾向を見せてている。西辺の南から3分の2にあたる約18mがS E 22、削平による推定延長線の区間を約4mおいてS E 5が続く。S E 5は、西辺残り約8mを構成し、約90°東へ屈曲した後、北辺約23mを構成する。底面は、西辺が北から南に低く、北辺が西から東に低くなっている。区画内の掘立柱建物は、S B 18、22~26である。S E 22、S E 5は、共に浅く、遺物は、土器小片、中世から近世の陶磁器小片が僅かに出土している。

S E 5は、上面幅0.8~1.4mである。S E 2、S E 3、S E 6、S E 24、S E 25、S C 8と重複する。  
S E 2、S E 3、S E 6、S E 8を切る。S E 24、S E 25との切り合いは不明である。

S E 22は、上面幅0.3~0.7mである。S B 16、S

B17と重複する。切り合いは不明である。

### S E 5出土遺物（第35図138、139）

138は、陶器碗である。高台が削り高く真っ直ぐに立ち上がっている。S E 1と接合関係がある。  
139は、陶器鉢である。内面に搔き落としが施してある。S E 3、S E 26と接合関係がある。

### 区画溝8（第26・27図）

区画溝8は、3区南東部と4区北部半分を囲むように位置し、S E 57・S E 35・S E 38から成る。4区東壁面中央から西に約50m延びた後、約110°の角度を保ちながら北北西へ約60m延びる。その後約90°東へ屈曲し東壁面までの約19m延びて調査区外へと続く。西辺は約62mである。溝の底面は、西辺は北から南に向かって低くなっている。北辺と南辺は西から東に向かって低くなっている。区画内の掘立柱建物は、S B 36~51である。S E 42、S E 36、S E 56と切り合い関係がある。S E 42は、区画溝8を構成するS E 38を切り、区画溝8を構成するS E 35がS E 36を切る。さらに区画溝8を構成するS E 57がS E 56を切る。

S E 57は、上面幅0.6~1.2m、深さ0.7~1.6m、断面形は船底形を示す。溝は浅く壁面の傾斜は、緩やかである。遺物の出土はない。S E 56と重複し、S E 56を切る。

S E 35は、上面幅0.6~1.5m、最深部が0.35mを測り4区北壁付近で削平により確認できない。壁面の傾斜は内側が緩やかで外側が急である。遺物は、近世の陶磁器片を中心に出土している。S E 36、S B 52と重複し、S E 36、S B 52を切る。

S E 38は、上面幅1.4~3.1m、深さ0.14~0.4m、断面形は船底形ないし逆台形を示す。少なくとも2回以上の掘り直しが行われたことが観察される。遺物は、近世の陶磁器片を中心に出土している。S B 34、S B 35、S E 42と重複する。S B 34、S B 35を切り、S E 42を切られる。

### S E 35出土遺物（第36図141、146）

141は、龍泉窯系青磁碗である。高台は骨付から外底にかけて無軸であり、胎土の鉄分により赤化している。

146は、産地不明の擂鉢である。口縁の外側に2条の凹線をめぐらしている。横目の単位は12条か。

### S E 38出土遺物（第36図140、142～145）

140は、龍泉窯系青磁皿で、見込に花文のスタンプが施してある。全面に施釉後外底の釉を輪状に削り取っている。

142は、くわわんか手の碗である。見込は蛇目釉剥ぎが施され、中央に五弁花のコンニャク印判。

143は、広東碗である。

144は、陶器碗である。見込に胎土目が2個熔着している。縮緬高台となっている。

145は、陶器色絵皿である。見込には樓閣山水文が描かれ、高台内には印鉢が施されている。

### 区画溝9（第26・27図）

区画溝9は4区北半部に位置し、S E 36から成る。北壁面東端部から南に約26m延び、その後約90°西へ屈曲して約22m延びる。溝の底面は、東辺は顕著な高低差は見られないが、南辺は明らかに西から東に向かって低くなっている。区画内の掘立柱建物は、S B 49～51である。

S E 36は上面幅0.4～1.5m、深さ0.05～0.31m、断面形は逆台形を示す。壁面の傾斜は内側が急で外側が緩やかで、埋土は自然堆積である。遺物は、僅かではあるが、近世の陶磁器を中心に出土している。S E 35、S B 52と重複し、S E 35、S B 52を切る。

なお、S E 52の南壁面土層断面からはS E 36がS E 52を切って延びていることが確認されるが、その後どのように延びていくか明らかにできなかったため、S E 52は区画溝9を構成する溝には含めていない。

### 区画溝10（第26・27図）

区画溝10は、4区北東部に位置する。S E 56から成る。東壁面北部から南に約14m延びた後、約90°

西に屈曲し約7m延びる。S E 56はS E 57に切られているため、それ以上は確認できなかった。底面は顕著な高低差は見られない。

S E 56は上面幅0.6～1.0m、深さ0.09～0.15m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は内外共に緩やかで、埋土は自然堆積である。遺物の出土はない。S E 57と重複し、S E 57に切られる。

### 区画溝11（第26・27図）

区画溝11は、3区東部に位置し、S E 42から成る。南から北に26m延びた後、約90°西に屈曲し約10m延びる。底面は北辺が西から東に向かって僅かに低くなっている。東辺は若干の高低差はあるものの一定の方向性はない。上面幅0.2～0.7m、深さ0.03～0.3m、断面形は舟底形を示す。壁面の傾斜は内外共に緩やかで、埋土は自然堆積である。

遺物は、僅かではあるが、中世から近世陶磁器片が出土している。S E 38、S B 39、S B 40、S B 44、S B 47と重複する。全てS E 42が切る。

### 区画溝12（第26・27図）

区画溝12は、3区中央やや西部に位置し、S E 41から成る。中央やや北部から南に約15m延びた後、約110°の角度を保ちレベルを上げながら西へ約6m延びる。底面は東辺が北から南に向かって低くなる。南辺は東西端部の高低差が約65cmを測り、西から東に向かって急激に低くなっている。

東辺は、上面幅1.5～2.1m、深さ0.45～0.73m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は内側が緩やかで、外側はやや急である。埋土は自然堆積である。南辺は、上面の最大幅は0.8mで西に行くに従って徐々に狭まっていく。深さは、0.4～0.8m、断面形は船底形で、埋土は自然堆積である。近世後半の遺物がまとまって出土している。他遺構との重複はない。

### S E 41出土遺物（第36図147～155）

147は、陶器の色絵碗である。色絵が剥がれ落ち花弁状痕となっている。

148は、陶器の碗である。縮緬高台となっている。

149は、初期伊万里の皿である。

150は、染付皿である。見込に五弁花のコンニャク印判が施されている。

151は、染付皿である。内面には楼閣山水文が描かれている。高台は、蛇ノ目四型高台となっている。

152は、広東碗である。見込には昆虫文が描かれている。

153は、陶器の鉢である。見込に胎土目が3個熔着している。

154・155は、陶器の徳利である。

#### 区画溝13（第28・29図）

区画溝13は、4区南東部から5区北東部に位置し、S E61・S E65から成る。4区東壁面南端部付近から西へ約19m延び、約90°南に屈曲して約5m延びる。5区は段落ちしている為、削平による推定延長線の区間を約10mおいて、約25m延びた後、約80°の角度を保ち東に屈曲して約30m延び、調査区外へと続く。北辺と西辺の一部がS E61、西辺と南辺がS E65という構成である。西辺は約42mである。底面は、北辺では若干の高低差はあるものの一定の指向性はない。西辺が北から南に低く、南辺が西から東に低くなる。

S E61は上面幅0.8～1.5m、深さ0.12～0.28m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は内側が緩やかで外側が急である。埋土は自然堆積である。遺物の出土はない。S E60、S E62、S E63、S E32と重複し、全てに切られる。

S E65は上面幅0.4～1.2m、深さ0.04～0.19m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は内側、外側共に緩やかである。埋土は自然堆積である。遺物の出土はない。他遺構との切り合いはない。

#### 区画溝14（第28・29図）

区画溝14は、4区南東部に位置し、区画溝13の約2m北側を並走する。S E60から成る。4区東壁南端部から西へ約18m延び約90°南に屈曲して約7m延び、5区へと向かう。その先は段落ちしているため確認できない。底面は北辺が西から東に向かって低くなる。

S E60の北辺は、上面幅0.05～0.13m、深さ0.06～0.14m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は内側、外側共に緩やかで、埋土は自然堆積である。西辺は4区南壁面土層により、S E61の埋土上層を走り5区へと続いていることが確認される。遺物の出土はない。S E61、S E62、S E63と重複する。S E61を切り、S E62、S E63に切られる。

#### 区画溝15（第28・29図）

区画溝15は、4区南部西半部に位置し、S E32から成る。4区南端部中央から南に約4m延び約90°西に屈曲して約29m延びる。底面は高低に一定の指向性は無い。上面幅0.5～1.2m、深さ0.2～0.35m、断面形は深めの逆台形状と傾斜のついたテラス状との混合形である。遺物の出土はない。S E61を切る。

#### 区画溝16（第28・29図）

区画溝16は、5区東部に位置し、S E66から成る。西壁面からコの字形に延び調査区外へと続く。北辺約24m、東辺約30m、南辺約14mである。底面は、北辺が西から東に低く、東辺が北から南に低い。南辺は西から東に低くなっている。上面幅1～1.4m、深さ0.08～0.22m、断面形は船底形を示す。壁面は外側がやや急で、内側が緩やかである。埋土は自然堆積である。遺物の出土はない。S E67、S E68と重複する。共にS E66が切る。

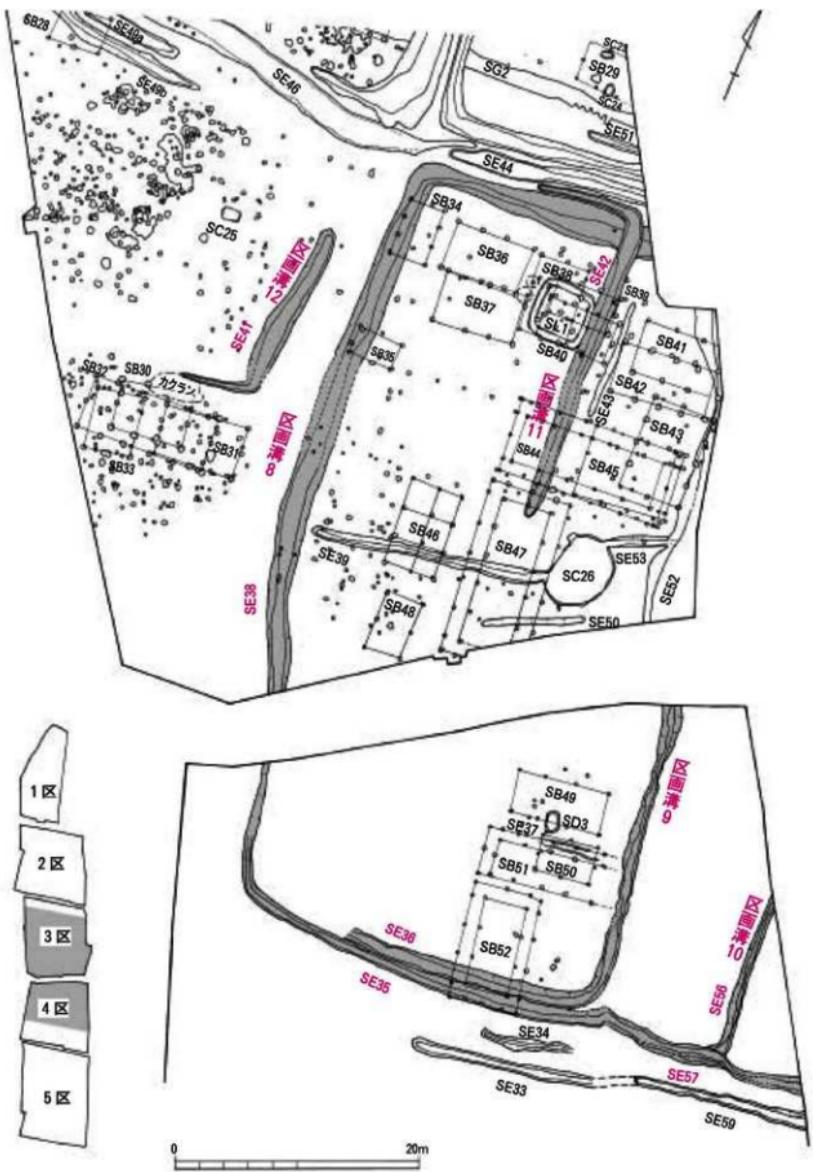
## 2 溝状遺構（S E；第30～33図）

区画溝として認定した溝以外にも、多数の溝を検出した。その主なものをここでは説明していく。

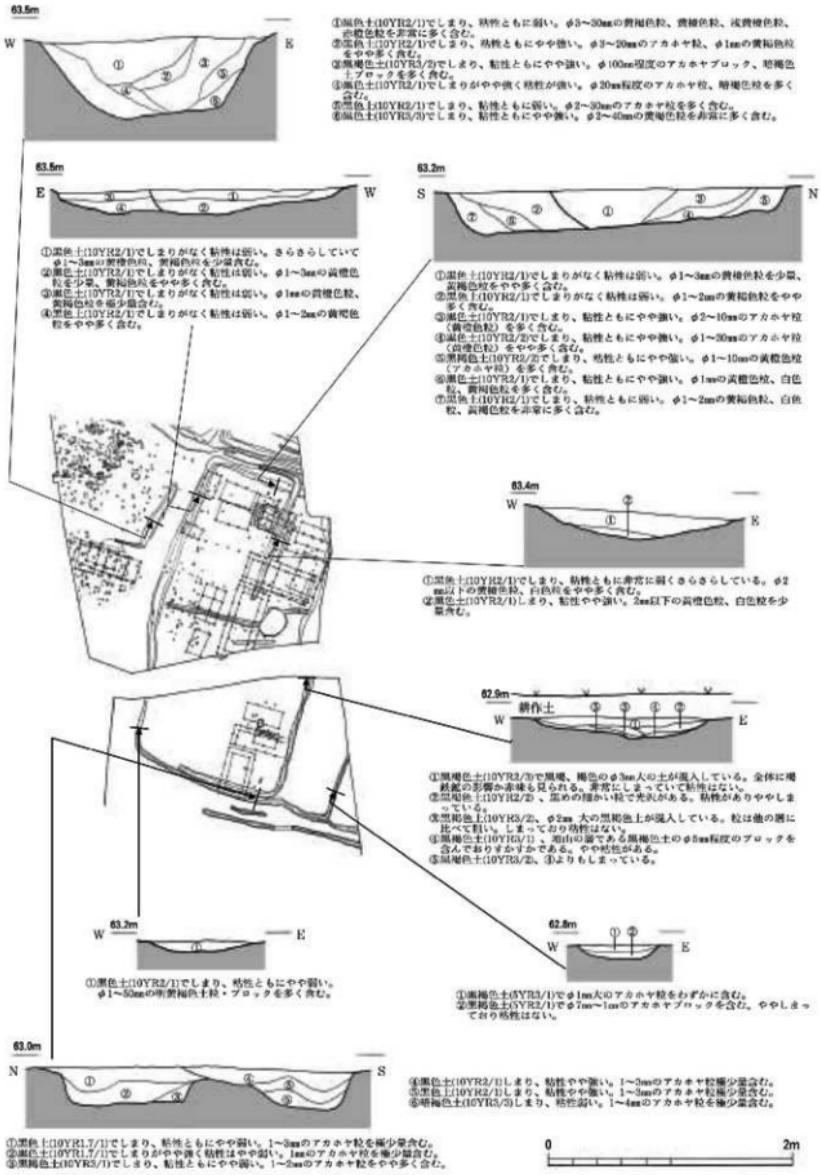
#### S E26・S E27（第22・23図）

S E26とS E27は、1区南部に位置し、南から北に緩やかな曲線を描きながら約30m延びている。土層断面からは、K-Ah面において自然の窪地があり、そこに堆積した層にS E27ができ、それを切る形でS E26ができたことが観察される。

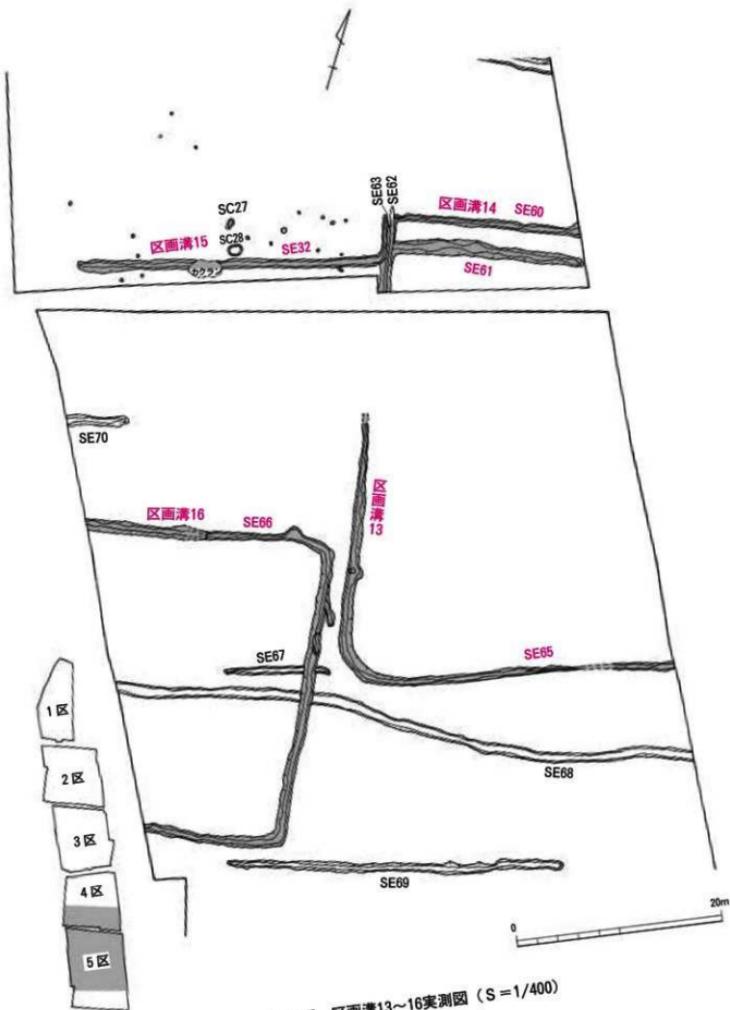
S E26は上面幅0.4～1.2m、深さ0.08～0.46m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は南から北に向けて低



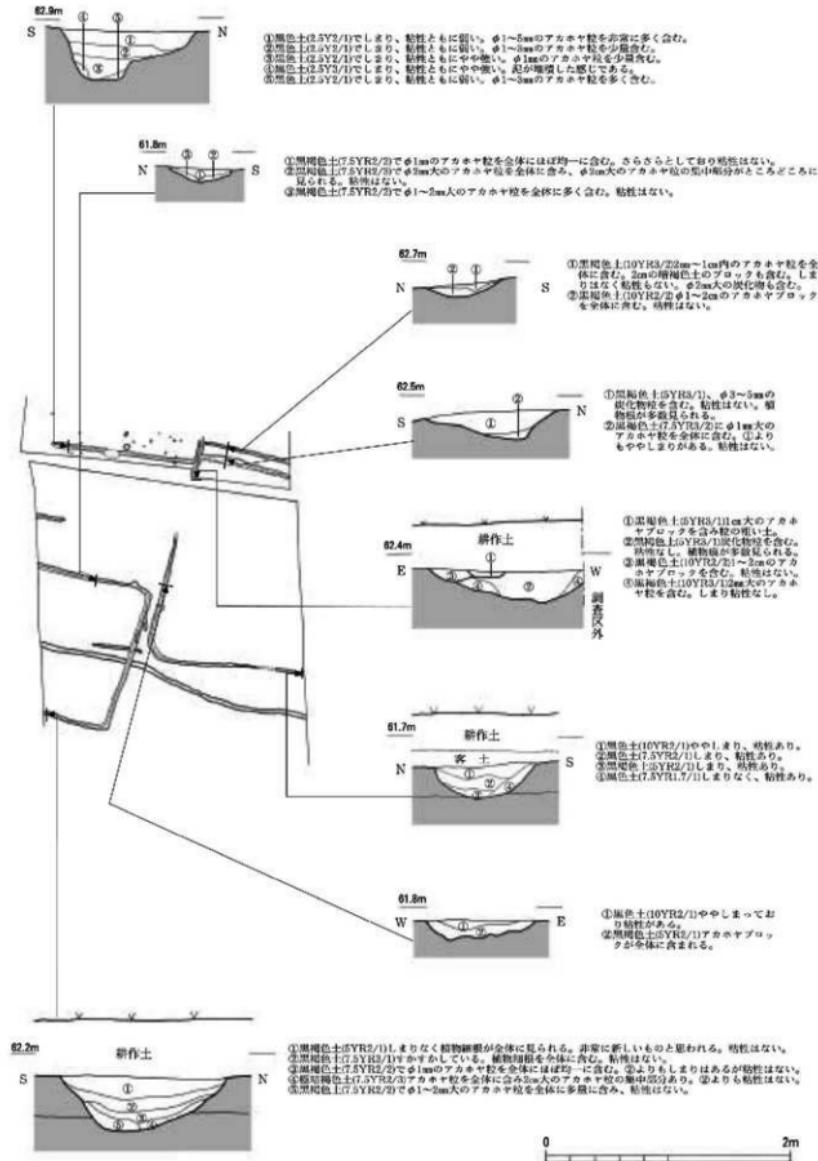
第26図 区画溝8~12実測図 (S=1/400)

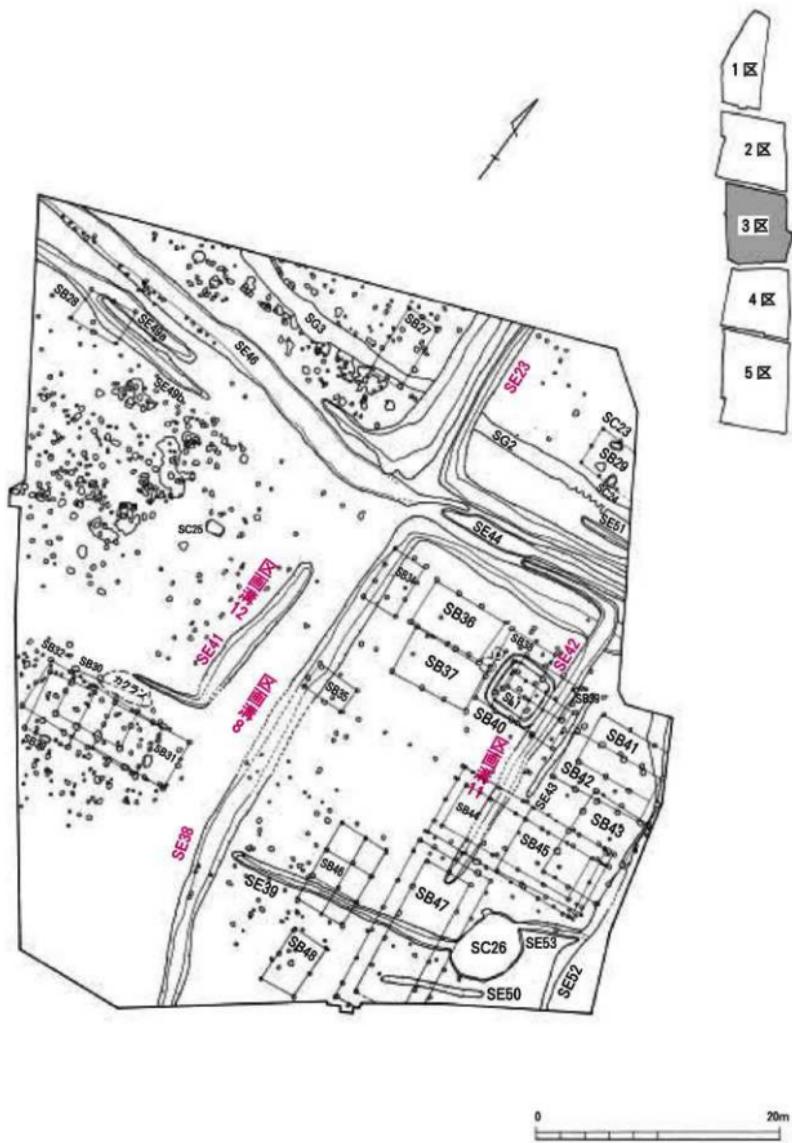


第27図 区画溝8~12土層図

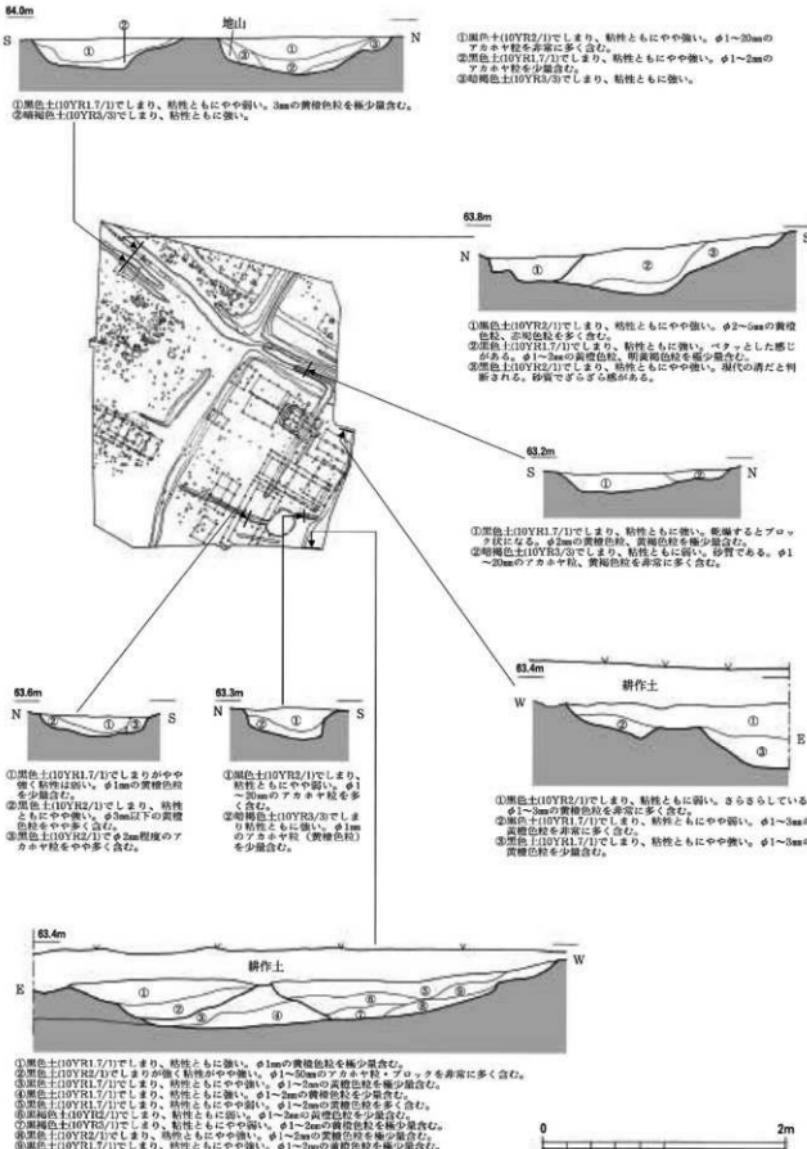


第28図 区画溝13~16実測図 ( $S = 1/400$ )

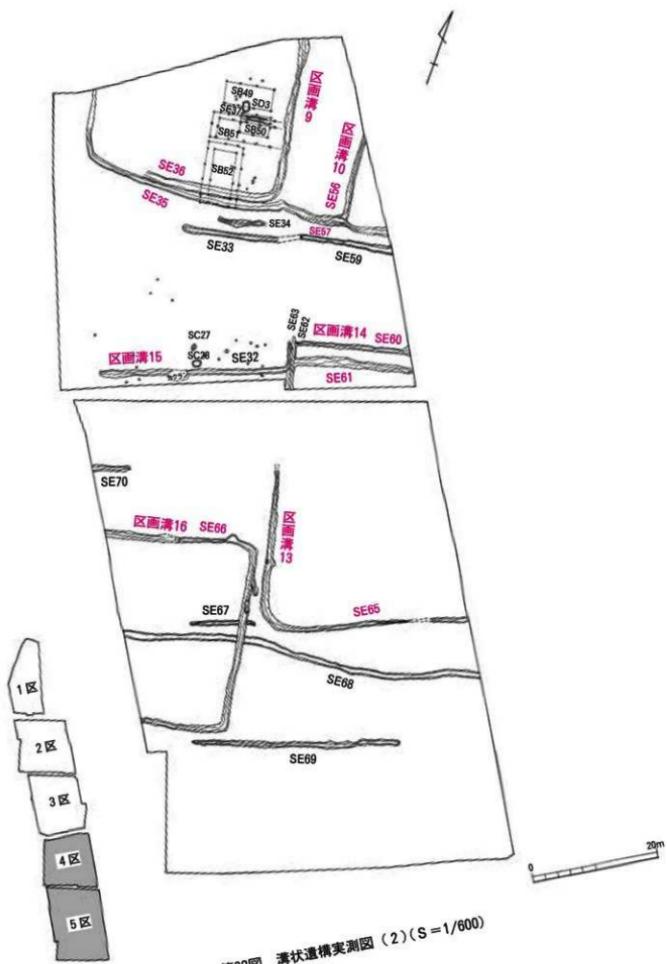




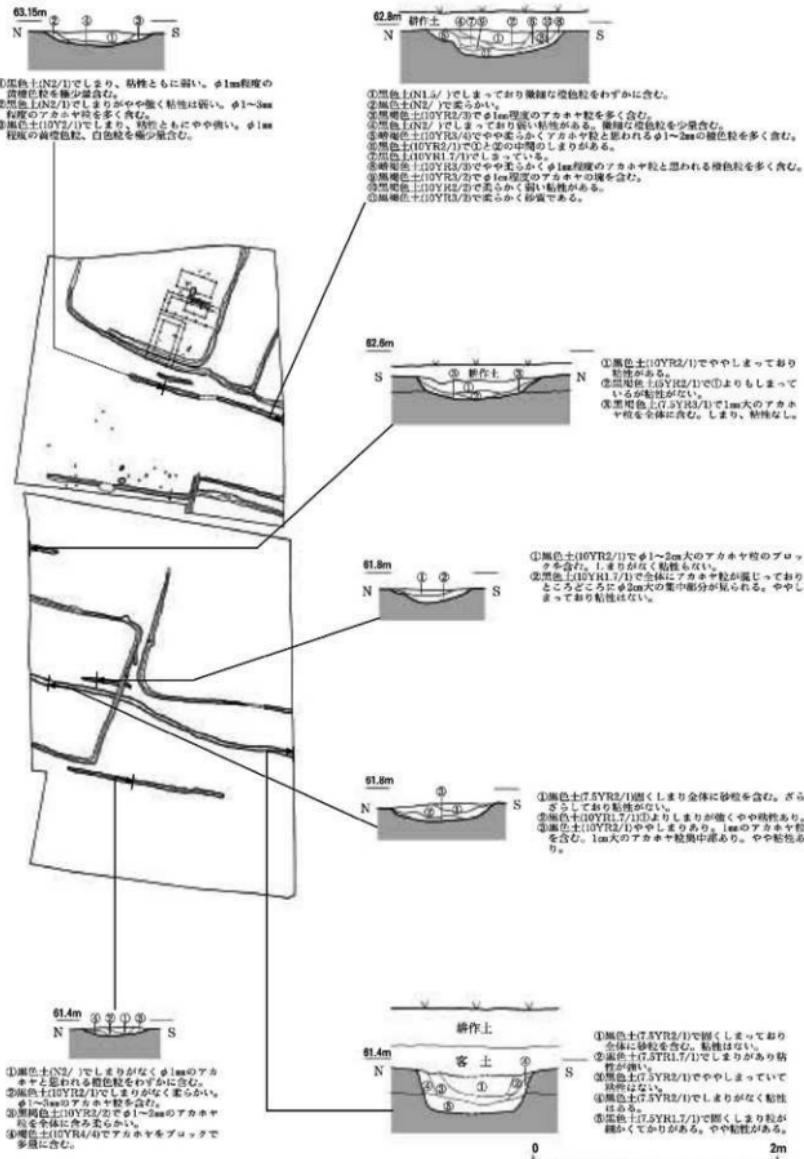
第30図 溝状造構実測図（1）(S=1/400)



第31図 溝状構造土層図（1）



第32図 溝状遺構実測図(2)(S=1/600)



第33図 溝状造構土層図（2）

くなっている。遺物は、中世から近世の陶磁器片が僅かに出土している。S E 27と重複し、S E 27を切る。

S E 27は上面幅0.3~0.9m、深さ0.02~1.2m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は南から北に向けて低くなる。遺物は、中世から近世の陶磁器片が僅かに出土している。S E 26と重複し S E 26に切られる。

#### S E 26出土遺物（第37図160、163~165）

160は、福建・広東系の青花碗である。  
163は、東播系の程鉢である。  
164は、備前焼の擂鉢である。  
165は、備前焼の擂鉢である。擂目は太目で10条を単位としている。

#### S E 46・44（第30・31図）

S E 46とS E 44は3区北上部に位置する。S E 46は、北壁面隅から東に約44m延びる。その東にS E 44が位置し約17m東に延び調査区外へと続く。S E 46とS E 44の流れにそって上層を同一の現代の溝が切っている。S E 46とS E 44とは、ある時期一つの溝を形成していたことも考えられる。

S E 46は上面幅1.2~2.5m、深さ0.08~0.57m、断面形は南側が深くやや変則的な逆台形である。壁面の傾斜は部分的に南側が二段掘り状態になってしまおり、北側は緩やかである。遺物は、中世の陶磁器片を僅かに含むが、近世後半の陶磁器片が大量に出土している。他構造との重複はない。

S E 44は上面幅0.5~1.6m、深さ0.18~0.28m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は南側がやや急で北側は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はほとんどない。他構造との重複はない。

#### S E 46出土遺物（第37・38図156、157、161、162、167、169、171~174、177~187）

156は、龍泉窯系青磁碗である。見込みに花文のスタンプが施してある。釉は疊付を超えて高台内面途中までかかる。

157は、龍泉窯系青磁鉢である。内面体部に丸のみ状施文具で蓮弁が表現されている。

161は、中国産青花皿。1mm程の厚い釉が掛かる。

162は、福建・広東系の青花皿である。胎土は褐色灰色で1mm程の厚い釉が掛かる。

167は、志野焼の菊花皿である。内外面共に長石釉が施されている。

169は、陶器皿である。口唇部に鉄釉を塗るいわゆる皮鯨手。見込に5個の胎土目が熔着している。

171は、京焼風陶器皿である。見込に樓閣山水文が描かれ、高台内に「清水」の印銘を施す。

172と173は、陶器の皿である。内面は、全面白化粧土を施し松模様の線刻が施してある。

174は、陶器碗である。口縁～胴部にかけて一部銅綠釉が施されている。

177は、陶器皿。内外面に刷毛目の文様を施す。

178は、染付碗（くらわんか手）である。

179は、染付の筒型碗である。外面には菊花文が描かれている。

180は、青磁染付碗（朝顔形碗）である。

181は、広東碗である。

182は、瀬戸・美濃の染付碗である。口紅装飾が施してある。

183は、瀬戸・美濃の碗である。腰部から脣付以外の高台底部に鉄釉を施す、いわゆる腰錆碗。

184は、染付皿。見込に蛇ノ目釉剥ぎが施してある。

185は、堺系の擂鉢。擂目は11条を単位としている。

186は、焙烙である。

187は、薩摩焼の土瓶である。

#### S E 49 a、S E 49 b（第30・31図）

S E 49は、3区北上部に位置している。S E 46の南側を並走し西から東に約8m延び、その後2本に枝分かれして約5~7m延びる。

S E 49は上面幅0.5~1.6m、深さ0.09~0.24m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかで埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなる。遺物は、中世から近世の陶磁器片が僅かに出土

している。S E28と重複し、S B28を切る。

#### S E49出土遺物（第37図166）

166は陶器碗である。胎土は淡黄色で軽量である。

#### S E52（第30・31図）

S E52は3区南東部隅に位置し南北に約26m延びる。南部、北部、東部が調査区外へと続く。南壁面土層断面からは複数の溝の切り合いも見られるが、調査区外に広がる為全容は不明である。遺物の出土はない。S E36、S E53、S B41、S B42、S B43と重複し、S E36、S B43に切られる。S E53、S B41、S B42との切り合いは不明である。

#### S E53・S E39（第30・31図）

S E53とS E39は、3区南部下にS C26を挟んで位置している。

S E53は上面幅0.5～0.7m、深さ0.17～0.23m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はない。S C26、S E52と重複する。共に切り合いは不明である。

S E39は上面幅0.4～1.2m、深さ0.04～0.23m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はない。S B46、S B47、S C26と重複する。S B47を切る。S B46とは直接的な切り合いはない。S C26との切り合いは不明である。

#### S E33とS E59（第32・33図）

S E33とS E59は4区中央から東部に位置している。S E33は中央やや西から東に向かって約16m延び、3m程途切れた後、S E59へと続き、約15m延びた後、調査区外へと続く。

S E33は上面幅0.6～1.1m、深さ0.02～0.14m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物は近世後半の遺物が僅かに出土している。他遺構との重複はない。

S E59は上面幅0.5～1.3m、深さ0.02～0.2m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はない。他遺構との重複はない。

#### S E33出土遺物（第37図、168）

168は、陶器碗である。見込に3個の砂目が熔着している。削り出し高台で兜巾あり。

#### S E68（第32・33図）

S E68は、5区中央を東西に緩やかに蛇行しながら約60m延び、調査区外へと続く。上面幅0.8～1.1m、深さ0.04～0.15m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はない。S E66と重複し、S E66に切られる。

#### S E69（第32・33図）

S E69は5区南部に位置し、東西に約32m延びる。上面幅0.4～1.2m、深さ0.3～0.1m、断面形は船底形を示す。壁面の傾斜は緩やかである。埋土は自然堆積である。底面は西から東に向けて低くなっている。遺物の出土はない。他遺構との重複はない。

#### S E8・S E9（第22図）

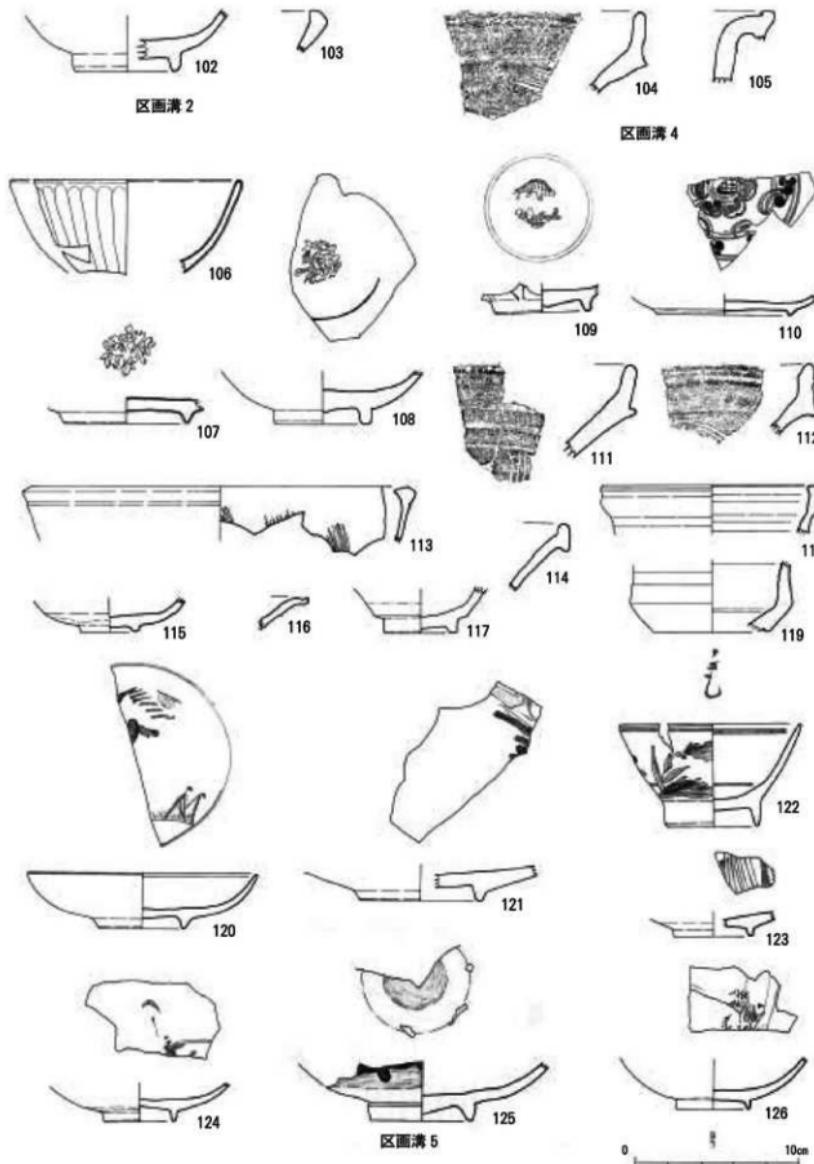
S E8、S E9は2区西壁面中央部に位置する。西側部分が調査区外へと広がるため、その全容を明らかにすることはできなかった。S E8もS E9も中世から近世の陶磁器片が僅かに出土している。

#### S E8出土遺物（第37図170、176）

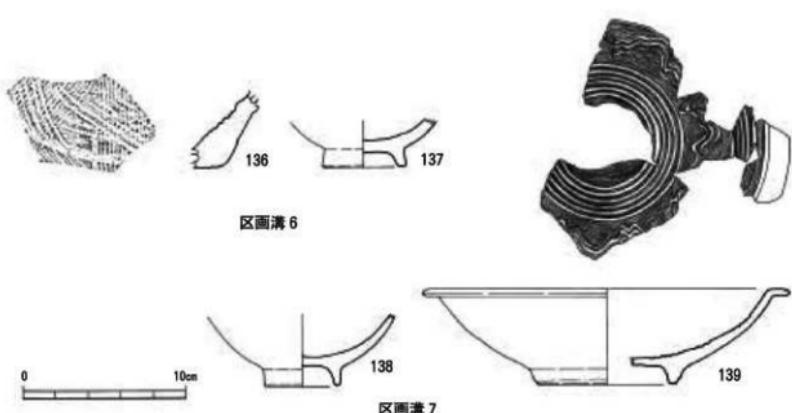
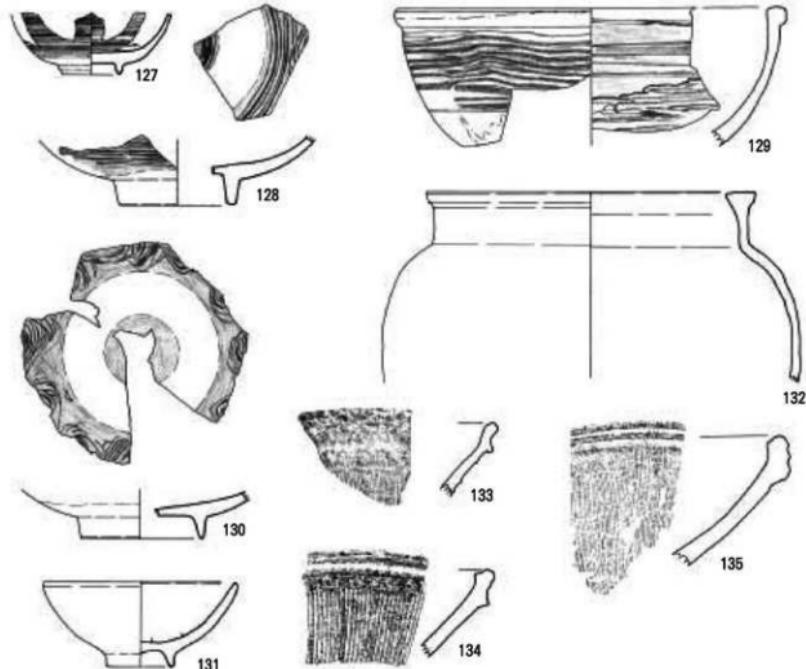
170は、陶器の碗である。縮緬高台となっている。176は、内野山窯系の皿。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。

#### S E9出土遺物（第37図158、175）

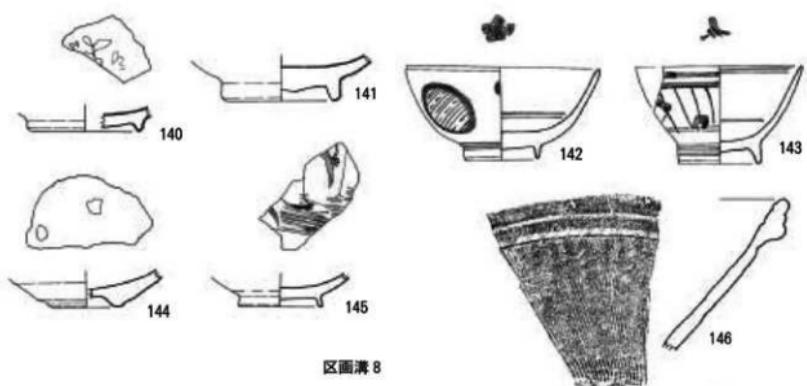
158は、中国産で見込に4個の胎土目が熔着している。高台は4か所がアーチ状になっている。



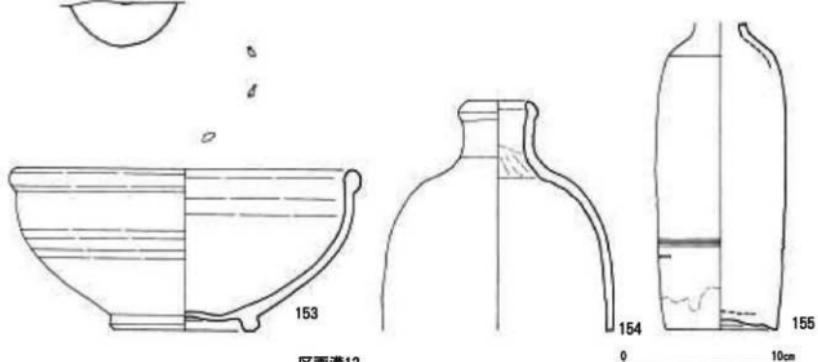
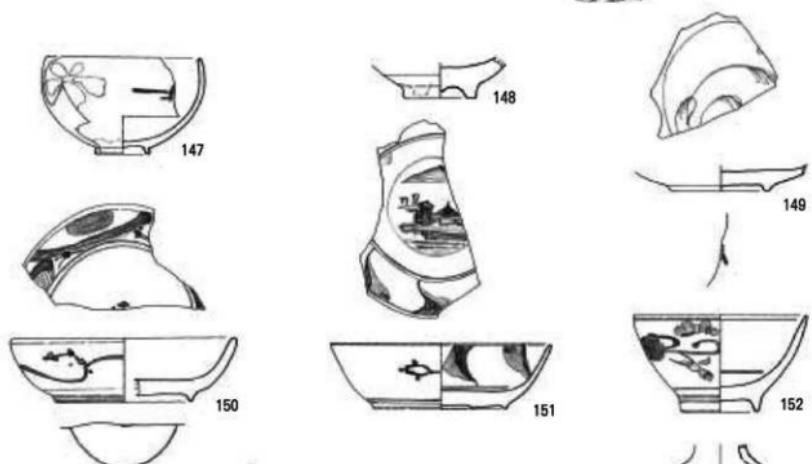
第34図 区画溝出土遺物実測図（1）



第35図 区画溝出土遺物実測図（2）



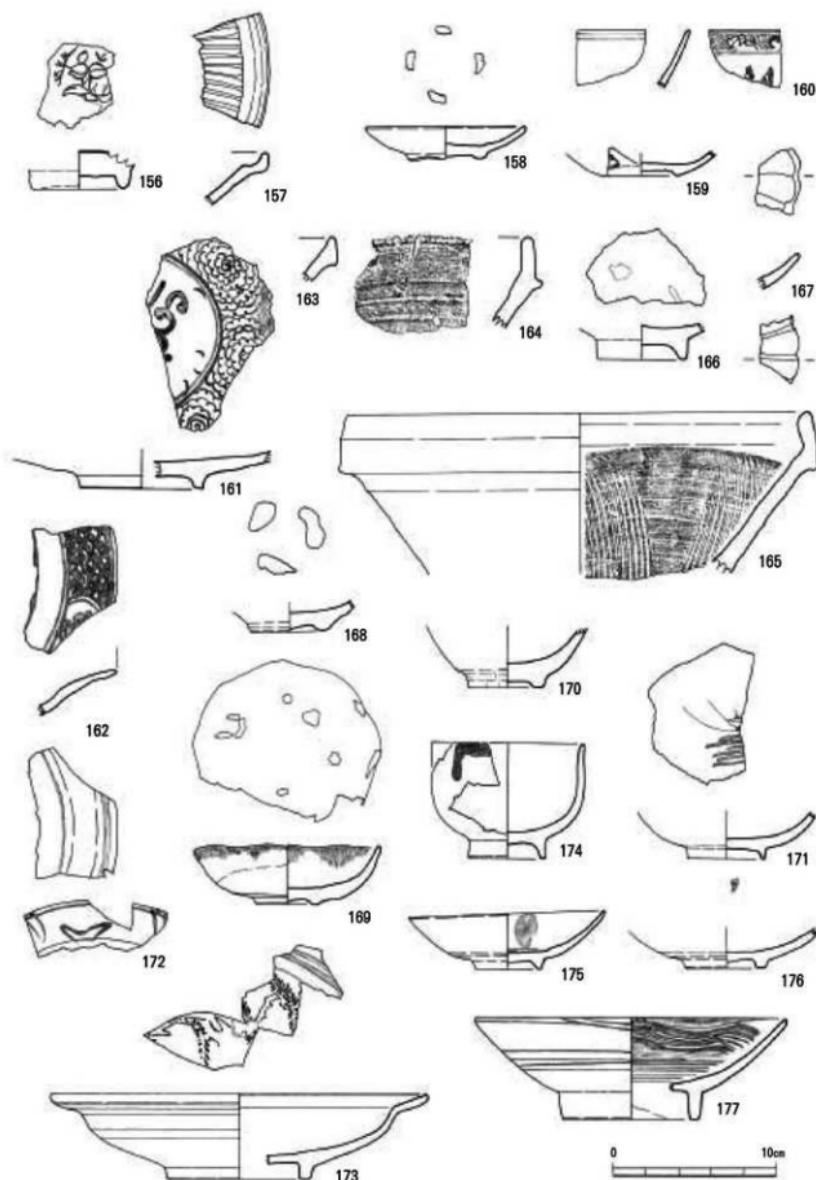
区画溝 8



区画溝 12

0 10cm

第36図 区画溝出土遺物実測図（3）



第37図 溝状遺構出土遺物実測図（1）